



KYOTO EXPERIMENT Office
6F 7th Hase Bldg.
229-2 Shoshoi-cho, Nakagyo-ku, Kyoto
604-0862 JAPAN
Tel +81 75 213 5839 Fax +81 75 213 5849



KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭 2026 プログラム発表

広報に関するお問合せ先☎ KYOTO EXPERIMENT 事務局（広報担当：前田、江口、齊藤）

Tel：075-213-5839 Mail：pr@kyoto-ex.jp

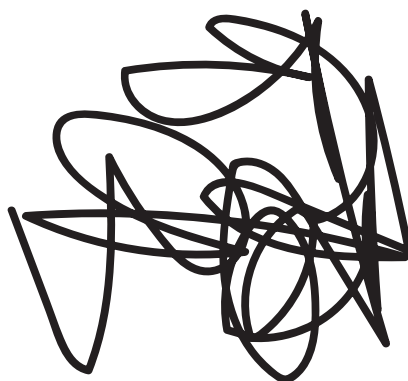
※本資料に掲載の画像をご使用希望の場合は上記までご連絡ください。

その他のお問合せ☎ KYOTO EXPERIMENT 事務局

☎ 604-0862 京都市中京区少将井町 229-2 第7 長谷ビル 6F

Tel：075-213-5839（平日 11:00-19:00 [開催期間中は無休]） Fax：075-213-5849

Mail：info@kyoto-ex.jp Web: kyoto-ex.jp



KYOTO EXPERIMENT とは

KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭は、
2010 年より毎年開催している京都発の国際舞台芸術祭です。今年で 17 回目を迎えます。
国内外の「EXPERIMENT（エクスペリメント）＝実験」的な舞台芸術を創造・発信し、
芸術表現と社会を、新しい形の対話でつなぐことを目指しています。
演劇、ダンス、音楽、美術、デザインなどジャンルを横断した実験的な表現が集まり、
そこから生まれる創造、体験、思考を通じて、舞台芸術の新たな可能性をひらいていきます。

※プレスリリースは、ウェブサイトよりダウンロードできます。

<https://kyoto-ex.jp/press/>

※広報用画像が必要な場合は、下記までお問合せください。

KYOTO EXPERIMENT 事務局（広報担当：前田、江口、齊藤）

Tel: 075-213-5839（平日 11:00-19:00 [開催期間中は無休]）

Mail: pr@kyoto-ex.jp

目次

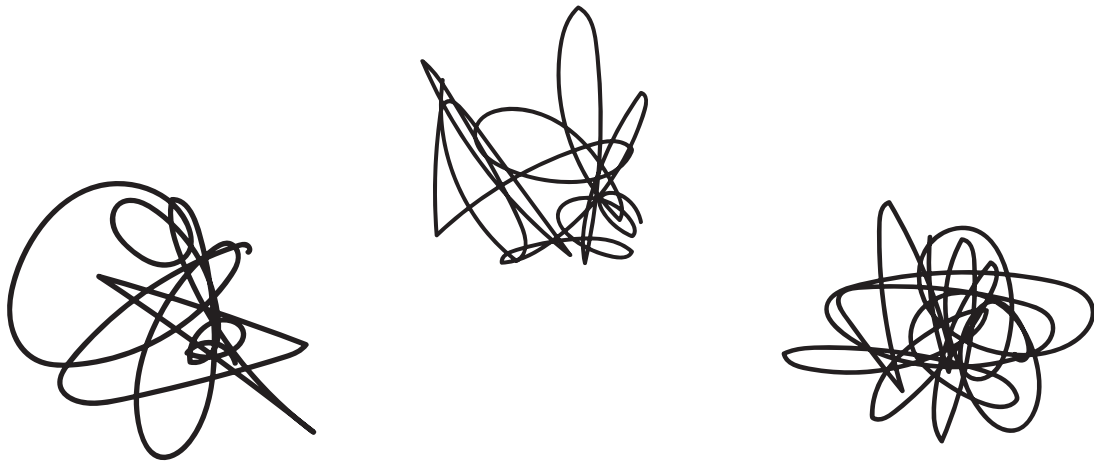
p.5	開催趣旨、概要
p.6	ごあいさつ
p.7-8	ディレクターズ・メッセージ
p.9	フェスティバルを構成する3つのプログラム
p.10-29	Shows（上演プログラム） 遠藤 薫 ミトゥ・セン 梅田哲也+追手門学院高校演劇部 ティアゴ・ロドリゲス カルメン・リー&チュンシン・オー／シアター・デュ・プーレ ホー・ルイアン Asian Playwright Project（アヒラン・カルナハラン、神里雄大、上田久美子） キム・カンヨン、イ・ミンジン、パク・ミンヒ アリス・リボル／Cia. REC 南野詩恵／お寿司 Echoes Now（小林 颯、倉知朋之介、泉 宗良／うさぎの喘ぎ） 山下 残&ニャー・トゥイエン with プロジェクト・デイ・サン 石原菜々子、金子仁司／kondaba
p.30	Kansai Studies（リサーチプログラム）
p.31-34	Super Knowledge for the Future [SKF]（エクスチェンジプログラム）
p.35	KYOTO EXPERIMENT × 国際交流基金「Sequence」
p.36	フリンジ「More Experiments」、ミーティングポイント
p.37-38	感想シェアカフェ、ブックフェア、パートナーホテル
p.39-41	関連プログラム、提携プログラム
p.42	会場
p.43-44	チケット情報
p.45	KEX サポーター
p.46-47	スケジュール
p.48-49	開催クレジット

開催趣旨

KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭 2026 は、「ポケットに石ころ」をキーワードに、多様な人々と舞台芸術の出会いと対話を生み出すフェスティバルとして開催します。

人類は荷物や道具を「運ぶ」と同時に、さまざまな記憶や物語をも世界各地に運び、多様な要素が混ざり合った文化や言語をつくってきました。分断、紛争、戦争が時代を象徴するものとなり、他者と物語を共有することが急速に困難になりつつあるいま、舞台芸術は、そして「フェスティバル」は、いかにこれらの物語を運び、共有する空間となり得るのでしょうか。人間にとって最も古いメディアであり、抵抗の象徴でもある石ころをそっとポケットに入れて、他者の記憶や物語を観客と共有する場としての舞台芸術祭を、分断に抗いながらあらためて考えます。

フェスティバルが根ざす関西地域をアーティストの視点で探究し、未来の創造的な土壌を耕していくためのリサーチプログラム「Kansai Studies」、世界各地の実験的な舞台芸術を紹介する上演プログラム「Shows」、実験的表現とそれが生まれる背景や、いまを考えるトピックを扱うワークショップやトークが体験できるエクステンジプログラム「Super Knowledge for the Future [SKF]」の3つのプログラムでフェスティバルを実施します。



概要

会期 2026 年 10 月 3 日（土）－ 10 月 25 日（日）

会場 ロームシアター京都、京都芸術センター、京都芸術劇場 春秋座、THEATRE E9 KYOTO、
京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA、京都府立府民ホール “アルティ”、京都市呉竹文化センター ほか

主催 京都国際舞台芸術祭実行委員会

[京都市、ロームシアター京都（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）、
京都芸術センター（公益財団法人京都市芸術文化協会）、
京都芸術大学 舞台芸術研究センター、
THEATRE E9 KYOTO（一般社団法人アーツシード京都）、
一般社団法人 KYOTO EXPERIMENT]

📖 ごあいさつ

京都市長ご挨拶

先駆的・実験的な芸術表現で、京都のまちに多くの衝撃と感動をもたらしてきた舞台芸術の祭典「KYOTO EXPERIMENT」が、17回目を迎える本年も盛大に開催できることを大変嬉しく思います。

開催に御尽力いただいた山本麻友美実行委員長をはじめ、すべての関係者の皆様に深く敬意と感謝の意を表します。

今年のキーワードは、「ポケットに石ころ」です。子どもの頃、公園や川原で遊ぶ時「石ころ」は道具であり宝物でした。

私たちは、「文化」「信条」「出会いの記憶」など、様々な「石ころ」を自らの内なる「ポケット」に入れて日々を暮らしています。御出演の皆様、そして劇場にお越しの皆様は、各々どんな「石ころ」を持ち寄られるのか。それらの「石ころ」が「ポケット」から取り出され、混ざり合うことでどんな変化が起こるのか。あるいは、何が生み出されるのか。SNS等による仮想世界でのつながりが当たり前になっている今だからこそ、劇場という現実の空間と時間の共有によってもたらされる生身の体験をお楽しみいただきたいと思います。

京都市としとしても、文化を基軸としたまちづくりで、多彩な人々が交ざり合い、誰もが個性を活かして活躍できる社会の実現に取り組んでまいります。御支援、御協力をお願いいたします。

京都市長 松井孝治

実行委員長ご挨拶

子どもの頃は漠然と、何にでも正解や王道、普遍的で絶対的な何かがあるように感じていました。しかし、大人になって歳を経るごとに、それらは曖昧で時代によって、あるいは地域によって、人によって、さまざまな要因で変化するものであることを知ります。

学生の頃、尊敬する美学の先生に、「芸術の価値が絶対的なものではなく相対的なものであるなら、その価値を担保するものは何か。批評家やキュレーターの仕事に一体どんな意味があるのか」と質問したことがあります。その時、先生は「それは君、説得力だよ」と即答されました。

この「説得力」という言葉は、哲学者カントが、美の判断は主観的でありながら、他者と共有できる普遍性を求めるものだと述べたことにも通じるものだと思います。私たちは例えば「美しい」と感じたとき、その感覚を他者と分かち合いたいと思ひ、なんとかしてそれを伝えようとします。この衝動は、どこから来るのでしょうか。

そして、その衝動から生まれる対話や説得の積み重ねによって、私たちのものの見方は少しずつ変化してきたと言えるかもしれません。かつて「普遍的」とされた美や人間の概念が、誰を排除していたかを問い直してきたのも、そうした対話の歴史に他なりません。カント自身の思想もその例外ではありません。

公共の文化事業において難しいと感じるのは、多様な価値観が併存する社会の中で、なぜその作品や表現が重要なのかを提示し続けることです。公平性や経済合理性といった指標とは相性が悪い場合も多く、単純な人気や多数決によって決まるものでもありません。異なる考えや立場が共存する社会のなかで、新たな視点や問いを投げかけ続けることが求められます。

いま世界は決して穏やかとは言えません。だからこそ、異なる視点や価値観に出会い、自らの考えを揺さぶられるような機会が必要なのではないでしょうか。KYOTO EXPERIMENTはプログラム全体を通して、そうした出会いを生み出す場であると考えています。そこで示される表現に、あなたが説得されるのか、それとも異なる考えを抱くのか。その体験そのものが、このフェスティバルの大切な価値だと思っています。

京都国際舞台芸術祭実行委員長 山本麻友美

📖 ディレクターズ・メッセージ

ポケットに石ころ、そして 2026 年の KYOTO EXPERIMENT

今年の KYOTO EXPERIMENT のキーワードは「ポケットに石ころ」。Shows プログラムの多くには、身体を通して他者の記憶や物語を選び、表現するという舞台芸術の営みそのものに立ち返り、いまを眼差している表現を見出すことができる。劇場が内包する個人と地域の記憶、失明する祖母が暗記し心の支えとした詩、検閲を逃れながら記される手紙、移民とその家族の土地との結びつき、身体と詩の交わりからつくられる本とダンス……これらの個人的・集合的記憶と物語は、他者と何かを共有する切実さをもって舞台芸術というメディアにより運ばれ、この KYOTO EXPERIMENT という空間と場で観客に手渡される。

いま世界で起こっていることに目を向けると、格差や分断に覆われ、紛争や戦争のなか、人道危機の状況は続いている。他者と物語を共有することが、いつのまにかとても困難になりつつあるなかで、フェスティバルが物語を選び、共有する場であり得ること、そのものを問いなおすことを、2026 年の開催を通してあらためて思考してみたい。そのためのキーワードとして、何かを運ぶためのポケット、そしてそこに、膨大な情報や記憶、時間を内包する、人類にとって最も古いメディアであり、抵抗の象徴でもある石——名もなき小さなものかもしれない、石ころを入れて持ち運ぶことをイメージして、「ポケットに石ころ」を提案したい。

経済格差や分断が極端に進む状況のなかでは、極端な政治信条を訴える政治家が支持を集め、わかりやすい経済指標で多くのものごとがはかられていく。文化にもまた、その足音は近づき、というかすでにその足の下に敷かれていて、経済的な尺度で評価される傾向が顕著に強まっていることは、文化芸術活動に従事する多くの人たちが感じているところではないだろうか。日本では、政府が博物館・美術館へ自己収入の数値基準を示したというニュースがあり、博物館・美術館も「稼ぐ」ことが求められているという。また、国立博物館や国立映画アーカイブなど、「国立」の文化施設で相次ぐクラウドファンディングは、国立の文化機関の予算建て付けそのものの課題を露呈している、という議論も巻き起こしながら進んでいる。

かという KYOTO EXPERIMENT でも補助金をいただき、活用させてもらってはいるのだが、数年前に設立された文化芸術活動基盤強化基金（クリエイター支援基金）では、日本の文化を「コンテンツ」として海外の「マーケット」へ展開させていく、つまり売り込んでいく動きが加速している。ヨーロッパのキュレーターたちからも、予算削減に関しての自国の文化担当省への嘆願書署名を求める連絡がアジアの我々のところに来るようになり、文化芸術への公的予算の考え方の変化は、世界の変容とも関係し、緊迫した状況を呈していることを感じている。

そのなかでの KYOTO EXPERIMENT の状況は、毎年このディレクターズ・メッセージでもお伝えをしてきた。新型コロナウイルス感染症拡大中の時期に京都市の財政悪化に伴い行われた行財政改革において、2022 年には、このフェスティバルを主催・運営する京都国際舞台芸術祭実行委員会の負担金のうち、京都市の負担金がコロナ前の 2019 年度と比べて大幅な減額となった。また、この年は KYOTO EXPERIMENT が例年獲得してきた国際交流を主眼とする文化庁助成金の採択金額が想定をかなり下回る金額となり、これらの事情により、ついに一般の観客の寄付によるクラウドファンディングに活路を見出さざるを得なくなった。2010 年に始まったこのフェスティバルにおいて、寄付制度は従来より設けていたものの、クラファンのように期限を切った資金調達キャンペーンを行ったのは、これが初めてだった。

幸いにも多くの方々の応援をいただいて 1 回目は無事に達成できたものの、それでは次の年、そしてその次はどう運営していくか……と頭を抱えたのち、編み出したのが 2023 年に始めた寄付によるサポーター会員制度で、これは 2026 年の現在に至るまで毎年募集し、毎年 140 名程度の登録と 300 万円を超えるご寄付をいただいている。サポーターのみなさまのあたたかな支援には、本当に感謝しかない。

こういった寄付による新たな財源獲得の試みも続けながら、さまざまな助成金を活用して現場の運営にも知恵を絞りながらなんとかここまで続けてきた、というのが KYOTO EXPERIMENT の実のところなのだが、補助金や助成金の枠組みにも変化が起こっており、フェスティバルが始まって以来、この 15 年以上ベースにしてきた予算組みの考え方はいよいよ通用しなくなっている。本年度、2026 年の開催はその影響が最も大きく出ているといえるかもしれない、プログラム構成には非常に頭を悩ませた。運営上のさまざまな工夫のうえ、今回参加が実現するアーティストたちは、それぞれに素晴らしい作品を発表してくれることを確信しているし、観客のみなさまとこれらのアーティストの作品との出会いをつくることができるのは、例年に違わず大きな喜びである。

これまで述べてきたような経済的な状況は抱えつつも、なんとかして今年も、エキスペリメンタルで挑戦的な表現をがんがん紹介したり、クリエーションしたりしたいし、今も、これからも、実験的舞台芸術とその土壌の発展のために KYOTO EXPERIMENT にできることはもっとあるはずである。今年だけでなく、今後に向けても、ポケットにさまざまな表現を含む石ころを入れて、フェスティバルとして歩いていきたいと、一層気持ちを新たにしている。みなさまの引き続きのご支援を、何卒よろしくお願いします。

KYOTO EXPERIMENT 共同アーティスティック・ディレクター
 川崎陽子 塚原悠也

🎪 フェスティバルを構成する3つのプログラム

ショウズ

① Shows (上演プログラム)

世界各地から先鋭的なアーティストを迎え、いま注目すべき舞台芸術作品を上演するプログラム。京都および関西における舞台芸術の変遷と動向に注目しながら、ダンス、演劇、音楽、美術といったジャンルを越境した実験的作品を紹介します。

🎪 参加アーティスト [上演順]

遠藤 薫 [展示・パフォーマンス]

ミトゥ・セン [展示・パフォーマンス]

梅田哲也+追手門学院高校演劇部 [演劇]

ティアゴ・ロドリゲス [演劇]

カルメン・リー&チュンシン・オー／シアター・デュ・プーレ [パフォーマンス]

ホー・ルイアン [パフォーマンス]

アヒラン・カルナハラン、神里雄大、上田久美子 [リーディング]

キム・カンヨン、イ・ミンジン、パク・ミンヒ [パフォーマンス]

アリス・リボル／Cia. REC [ダンス]

南野詩恵／お寿司 [演劇]

小林 颯、倉知朋之介、泉 宗良／うさぎの喘ぎ [パフォーマンス・演劇]

山下 残&ニャー・トゥイエン with プロジェクト・デイ・サン [ダンス]

石原菜々子、金子仁司／kondaba [演劇]

カンサイ・スタディーズ

② Kansai Studies (リサーチプログラム)

京都発の国際舞台芸術祭として、フェスティバルが立脚する「地域」について自覚的に捉え、フィールドワークを通して探求するプログラム。アーティストが中心となり、地域住民やプロデューサー、研究者と一緒に、京都や関西の文化を継続的にリサーチしていきます。活動を通じて生まれた思考の軌跡やプロセスは、メディアプラットフォーム note にて公開。未来のクリエイターや企画のためのナレッジベースや実験場、アイデアソースとなることを目指します。

🎪 リサーチャー

石原菜々子、金子仁司／kondaba [大阪 (日本)]

スーパー・ナレッジ・フォー・ザ・フューチャー

③ Super Knowledge for the Future [SKF] (エクスチェンジプログラム)

アーティストは未来を予見する!? とりわけ実験的な舞台芸術作品と社会を対話やワークショップを通してつなぎ、新たな思考や対話、フレッシュな問題提起など、未来への視点を獲得していくプログラム。実験的表現が映し出す社会課題や問題をともに考え、議論し、現代社会に必要な智恵や知識を深めていきます。ここで獲得できるスーパー知識(ナレッジ)は、予測不能な未来にしなやかに立ち向かうための拠り所となるはずです!

Shows

遠藤 薫「二十世紀の睡眠法」 | ミトゥ・セン「Unwritten Intimacy—暗黙の親密さ」
The sleep in the 22nd C. *Unwritten Intimacy*

[日本各地、ニューデリー（インド） | 展示・パフォーマンス] 新作

[展示]

10.1（木）-11.8（日）10:00-18:00

休館日：10.3（土）-10.5（月）、10.13（火）、
10.19（月）、10.26（月）

[パフォーマンス]

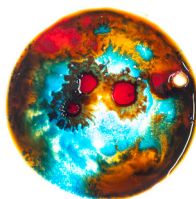
10.3（土）13:30 ★

10.4（日）12:00 ★

★ポスト・パフォーマンス・トーク

10.3（土）13:30 の回 登壇者：遠藤 薫

10.4（日）12:00 の回 登壇者：ミトゥ・セン



©遠藤 薫 撮影：吉本和樹



©ミトゥ・セン

上演時間 105 分（予定）

ミトゥ・セン パフォーマンス：30 分（予定）

途中転換休憩：15 分（予定）

遠藤 薫 \ Maher Shalal Hash Baz パフォーマンス：60 分（予定）

* ミトゥ・セン パフォーマンス：18 歳未満入場不可。刺激の強い表現が含まれます。

* 遠藤 薫 \ Maher Shalal Hash Baz パフォーマンス：年齢制限はありません。

会場 京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA

見えること、隠れること、
その間にあるものたち

本企画は、アーティストの遠藤薫とミトゥ・センによる二人展。それぞれの身体的アプローチを通して、展示空間にふたつの世界が現れる。鑑賞者はそのあいだを行き来しながら、今という時代を見つめるための新たな想像力と知覚の回路をひらいていく。

遠藤 薫「二十世紀の睡眠法」

シルクロードを介した異文化混交、赤と青という色彩の不可分性、現代社会、戦争——。工芸的手法を手がかりに人々の営みに光を当ててきた遠藤薫は今回、複層的なモチーフや記憶の断片を重ね、物事の表層とその裏にひそむものの関係を探求する。会場には「舟」のような大きな構造物と、着物の帯や絨毯などのテキスタイルが出現。10月3日・4日のオープニングパフォーマンスでは、日本の実験音楽バンド「Maher Shalal Hash Baz」と共に、観客を作品の物語世界へと誘う。

ミトゥ・セン「Unwritten Intimacy—暗黙の親密さ」

インドを拠点に活動するミトゥ・センは「ラディカル・ホスピタリティ」をテーマに掲げ、詩的かつ反逆的なアプローチで、言語や権威、社会的規範を問い直してきた。日本の「間」の概念を創作の手法に取り入れた本作では、センがこれまで実践してきた不可読性〈読み取ることの難しさ〉や脆弱性への探求を深化させていく。概念的な装置として用いるのは、マンガや春画に着想を得たドローイング。可動式の鑑賞キャビネットと中に隠されたドローイング、没入型のサウンド、観客参加によって立ち上がる作品は、検閲や想像力、権力システムによって、親密さや欲望がどのように媒介されるかを映し出す。10月3日・4日のパフォーマンスでは、ミトゥ自身によるライブパフォーマンスも行われる。

遠藤 薫 Kaori Endo

1989年、生駒山（奈良、大阪）生まれ。2013年沖縄県立芸術大学工芸専攻染織科卒業。2016年志村ふくみ（紬織、重要無形文化財保持者）主宰アルスシムラ卒業。沖縄や東北をはじめ国内外で、その地に根ざした工芸と歴史、生活と密接な関係にある政治の関係性を紐解き、主に染織技法を用いて、制作発表を続けている。雑巾や落下傘、船の帆などを制作し、「使う」ことで布の生と人々の生を自身の身体を用いてパフォーマンスにトレースし、工芸の本質を拡張することを制作の核とする。最近の主な展示に「CONNEXIONS | コネクションズ ―接続するアーティストたち」（鳥取県立美術館、2025）、「周辺・開発・状況 ―現代美術の事情と地勢―」（下瀬美術館・広島、2025）、「重力と虹霓／南波照間島について」（大阪中之島美術館、2023）、「国際芸術祭「あいち2022」（豊島記念資料館・愛知、2022）、「いのちの裂け目―布が描き出す近代、青森から」（青森公立大学 国際芸術センター青森、2020）など。第13回 shiseido art egg では art egg 大賞を受賞した。



撮影：西岡心平

ミトウ・セン Mithu Sen

アーティスト。インド・ニューデリーを生活と創作の拠点とする。コンセプチュアル・アート、および分野横断的な活動を行い、その実践によって社会規範や制度的権威、美術界における序列を覆す。徹底したもてなしと、永続的な不適合という哲学を通して固定化されることに抗い、詩的で遊び心にあふれ、そしてしばしば挑発的な振る舞いを用いてアイデンティティや帰属、権力を再考する。センの作品は社会的ルールや儀礼、リンガ・フランカ（共通語）の政治性を解体し、身体に従属、そして言語と美術界を支配する不文律を批判的に取り上げる。センの作品は、時には混乱、時には優しさを伴う象徴的な介入行為として、意味が抜け落ち、台本が消えて、存在の新しい形が生まれる場所に観客を誘う。センの活動はいくつもの大陸を行き来し、多数の芸術祭、美術館、ギャラリー、そして、既存の慣習が試され、序列が揺さぶられるプラットフォームで作品を発表してきた。2023年には、これまでセンが取り組んできた儀礼的慣習の解体が、メルボルンのオーストラリア現代美術センター（ACCA）での個展に結実した。また、25年におよぶ活動についての単著『Unmyth』が2025年に発刊されている。これまでに、インドの Škoda 賞（2010）、Prudential Eye Award for Contemporary Asian Art の Drawing 賞などを受賞している。



梅田哲也 + 追手門学院高校演劇部

[大阪（日本） | 演劇] 新作

まだ来ていないことがもう来ている

Yet Already

10.3（土）16:30

10.4（日）13:00 / 17:30

会場 romeシアター京都 ノースホール

上演時間 70-90 分（予定）

言語 日本語（英語サポートあり）



撮影：井上嘉和

劇場は、わたしたちが進む途中

インスタレーションやパフォーマンスを通して、それぞれの場所に既に存在する構造や環境、人々の営みや偶然生じる現象を手がかりに作品を発表してきた梅田哲也。今回は高校演劇を起点に、追手門学院高校演劇部の部員一人ひとり、コラボレーター、劇場で働く人々との対話を重ねながら新作を創作する。

梅田は、劇場を「異なる時間や場所にある出来事を、ひとつの空間へ同時に立ち合わせることのできる装置」として捉える。本作では、高校生たちの日常、劇場に積み重ねられてきた時間、その場所に残る風景や記憶、そして劇場の外で進行する出来事が、同じ舞台の上に居合わせる。

10代の声を通して、過去と未来、ここにあるものと遠くにあるものが劇場の中で響き合う。その重なりから生まれる出来事を、舞台に立つ者たちと観客がともに目撃する。

梅田哲也 UMEDA Tetsuya

現地にあるモノや日常的な素材と、物理現象としての動力を活用したインスタレーションを制作する一方で、パフォーマンスでは、普段行き慣れない場所へ観客を招待するツアー作品や、劇場の機能にフォーカスした舞台作品、中心点を持たない合唱のプロジェクトなどを発表。先鋭的な音響のアーティストとしても知られる。近年の展覧会に「湿地」（東京都現代美術館、2025-2026）、「wait this is my favorite part / 待ってここ好きなとこなんだ」（ワタリウム美術館・東京、2023-2024）、「梅田哲也 イン 別府『O滞』」（別府各所ほか、2020-2021）、「うたの起源」（福岡市美術館、2019-2020）「See, Look at Observed what Watching is」（Portland Institute for Contemporary Art, ポートランド、アメリカ、2016）がある。パフォーマンス作品に『空洞』（座・高円寺、東京、2026）、『Walk about Water』（ナムジュン・パイク・アートセンター、龍仁・韓国、2024）、『リバーウォーク』（KYOTO EXPERIMENT 2022）、『9月0才』（高槻現代劇場 市民会館、2022）、「Composite: Variations / Circle」（クンステン・フェスティバル・デザール 2017、ブリュッセル・ベルギー）、『INTERSHIP』（国立アジア文化殿堂、光州・韓国、2016 / TPAM- 国際舞台芸術ミーティング in 横浜 2018、KAAT 神奈川芸術劇場ホール）など。

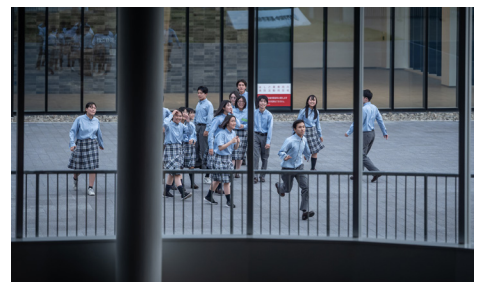


Photo by Tanaka Chihiro

追手門学院高校演劇部 Otemon Gakuin High School Drama Club

大阪府茨木市にて高校生23名、中学生2名で活動中。入部時にはほとんどの生徒が演劇未経験だが、すべての公演に全員が俳優として出演する。自分たちでお互いの話を聞き合い、部員のエピソードを重ねて作品創作を行うのが特徴。演劇活動と地続きなものとして身体と言葉を用いた関わりを学ぶ場であることを重視し、バラバラなままとともにいることができるコミュニティづくりが演劇の技術習得よりも部員にとって大きな課題となる。

2025年度に大阪府高等学校演劇研究大会で優秀賞・個人演技賞・創作脚本賞を、近畿高等学校演劇協議会優秀創作脚本選考会で優秀脚本賞を受賞。



撮影：井上嘉和

ティアゴ・ロドリゲス [アマドラ、アヴィニョン（ポルトガル、フランス） | 演劇]

日本初演

By Heart—心で覚える

10.3（土）18:30

10.4（日）15:00 ★

★ポスト・パフォーマンス・トーク

会場 romeシアター京都 サウスホール

上演時間 100-120 分

言語 英語（日本語字幕あり）

*10 歳以上推奨。

演出の都合上、開演後にご予約のお席に案内できない場合があります。



Photo by Christophe Raynaud de Lage

「記憶と連帯」を抵抗の手段に。

魂を揺さぶる話題作が日本初演！

「ご覧のとおり、舞台の上には 10 脚の椅子があります。今からここに座ってくださる 10 名の観客を募集しますが、その方にはあるテキストを暗唱いただきます」。

ポルトガル出身の劇作家・演出家で、アヴィニョン演劇祭（フランス）のディレクターを務めるティアゴ・ロドリゲスの代表作『By Heart—心で覚える』は、即興的なこんな招待からはじまる。語り手となるのはロドリゲス自身だ。舞台上の 10 人に一篇の詩を教えながら、激動の 20 世紀の歴史と、戦争や抑圧に抗った作家たちの人生や言葉、文学作品の数々を引用していく。そこに折り重ねるように語られるのは、視力を失いつつある自身の祖母との日々。わたしたちはやがて、彼女から孫への“ある依頼”について、なぜこの詩が選ばれたのかを知ることとなる。

2013 年の初演以来、各国で再演を重ねてきた傑作が待望の日本初演。個人の記憶と共同体の歴史が交差するなか、本作は共に「記憶」し、継承することを抵抗の術として高らかに提示する。

ティアゴ・ロドリゲス Tiago Rodrigues

1977 年ポルトガル・アマドラ生まれ。俳優、演出家、劇作家、プロデューサー。2022 年よりフランス・アヴィニョン演劇祭のディレクター。演劇学校の学生だった 1997 年、ベルギーの劇団 tg STAN で俳優としての活動を開始。その自由で対等な創作環境に大きな影響を受ける。2003 年、マグダ・ビザロと共に劇団ムンド・ペルフェイトを設立。2015 年から 2021 年までリスボンのドナ・マリア 2 世国立劇場のディレクターを務める。2019 年にフランス芸術文化勲章シュヴァリエを受勲し、同じ年にポルトガル最高の芸術賞プレミオ・ペソアを受賞するなど、国内外で高い評価を受けている。劇場を人々が集う場、互いの考えを語り合い、時間を共有する場所として捉えている。実話とフィクションの融合であれ、古典の再解釈や小説作品の脚色であれ、ロドリゲスの創作は俳優との協働に依拠し、演劇を通じた現実の詩的変革を追求し続けている。ロドリゲスが赤十字と国境なき医師団にインタビューして創作した戯曲『不可能の限りにおいて』は、KYOTO EXPERIMENT 2025 にてリーディング公演として紹介された。



Photo by Christophe Raynaud de Lage

カルメン・リー & チュンシン・オー / シアター・デュ・プーレ

[香港、アムステルダム（オランダ） | パフォーマンス] 日本初演

私書箱 No.211

GPO Box No.211

10.10（土）14:00 ☆★

10.11（日）14:00 ☆

10.12（月・祝）13:00 ☆

☆プレトークあり（開演 30 分前より）

★ポスト・パフォーマンス・トーク

会場 京都市立芸術大学 多目的ギャラリー

上演時間 60 分

* 開演後は途中入場不可。
座席のご用意はありません。



Photo by Thomas Lenden

たとえ身体の自由は奪えても
わたしの心は奪えない

「私書箱 No.211」は、チュンシン・オーが以前使っていた私書箱のこと。個人情報伏せ、彼が3年間手紙を交わした相手は、民主化デモに参加したことで政治犯として収監された友人シウ・ミン（仮名）だ。厳しい検閲をくぐり抜けた数は14通。オーはこの“抵抗と友情の記録”を独自のコードを用いて編み直し、密かに開示することを試みる。「シアター・デュ・プーレ」を共同主宰するカルメン・リーとの協創で、象徴としての“紙”が主人公となるオルタナティブな世界を立ち上げていく。

二人の手紙が次第に詩や暗号めいたものへ変化していったように、舞台上の紙もひとつの意味にとどまらない。絶えず変化し、身体と融合し、闇や光を宿しながら、二人の断絶や希望を映し出す。言葉はなく、紙が軋む乾いた音が響くのみ。だがそれは何よりも雄弁で強靱だ。世界各地でも民主主義が揺らぎはじめるいま、精神の自由と連帯を求め続けることの意味を、本作は何度でも静かに問いかける。

主催：KYOTO EXPERIMENT、京都市立芸術大学
助成：オランダ王国大使館

京都市立芸術大学
Kyoto City University of Arts

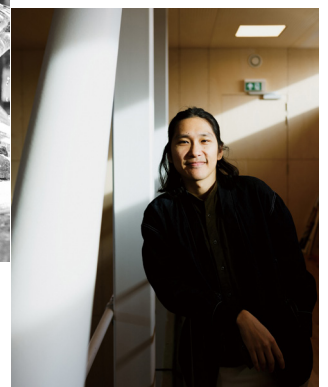


シアター・デュ・プーレ Theatre du Poulet

2016年に設立された、カルメン・リーとチュンシン・オーによるパフォーマンス・デュオ。香港出身のふたりは、2015年にカナダのノバスコシア州に拠点を移し、現在はオランダとカナダを往来しながら活動。国境を越えた芸術的文脈、リサーチの文脈を扱っている。視覚的詩学やオブジェクト・シアター、クリエイティブ・テクノロジー、ドキュメンタリー演劇、サイトスペシフィックな上演が交差する地点を探求し、既存の形とは違う演劇体験を創り出そうとしている。視覚や感覚的体験、実験性に関わるドラマツルギーに重きを置き、話される言葉への依存を最低限に抑えた作品は、言語的、文化的な文脈の違いを超えて、幅広い国際的な観客層に届けられている。『私書箱 No.211』は、ZKB Acknowledgement Prizeを受賞したチューリッヒ・シアター・スペクタクル（チューリッヒ・スイス、2024）での上演をはじめ、ル・マイヨン・ストラスブール劇場（ストラスブール・フランス、2025）、Festival Schlossmediale（ヴェルデンベルク・スイス、2025）、Queering Puppets Festival（アムステルダム・オランダ、2025）、サマーワークス・パフォーマンス・フェスティバル（トロント・カナダ、2026）など国際的にツアーを行っており、今後は2026年11月にシャウブーデ・ベルリン（ベルリン・ドイツ）で上演が予定されている。



カルメン・リー
Photo by Lukáš Veselý



チュンシン・オー
Photo by Peteris Viksna

ホー・ルイアン [シンガポール | パフォーマンス] 日本初演

歴史のすがた / 知能の立脚点

Figures of History and the Grounds of Intelligence

10.10 (土) 17:00

10.11 (日) 18:00 ★

★ポスト・パフォーマンス・トーク

会場 京都芸術劇場 春秋座 (特設客席)

上演時間 85 分

言語 英語 (日本語字幕あり)

*13 歳以上推奨



Photo by Clarence Aw
Courtesy of Singapore International Film Festival

AI は歴史を表象できるのか？

知性と倫理の未来を問うレクチャー

ある一枚の歴史的絵画が美術館を離れ、人間の脳を模したとされる“ニューラルネットワーク”に取り込まれるとき、何が起ころうか。巨大化する生成 AI が、わたしたちの経験や記憶が集積された歴史を「学習する」とき、語られる物語はどのように変容するだろうか。本作はシンガポールを拠点に、緻密なリサーチと映像、現代アートの手法を横断しながら「権力とイメージ」の関係を問い続けてきたホー・ルイアンによる、いま観るべき最も刺激的なレクチャー・パフォーマンスだ。

Google フォーラムでの個人的体験を出発点に、ホーは現在の AI の機械学習モデルでは、いかなる画像もノイズの反復として処理され、意味や文脈が失われていく未来を示唆する。一方で、冷戦下の国家計画や脱植民地化、インターネット黎明期の歴史を語り直すことで、現在の生成 AI ブームの背後で交錯する権力構造を浮き彫りにする。舞台上の二つのスクリーンには、実在するアーカイブ資料と、リアルタイムで生成される奇妙なイメージが投影され、人間による歴史叙述と AI による機械的な(誤)認識が並走していく。問われているのは表象の未来だけではない——。機械に思考をゆだねる時代における、知性をめぐる倫理そのものだ。

主催：KYOTO EXPERIMENT、国際交流基金
KYOTO EXPERIMENT × 国際交流基金「Sequence」事業



ホー・ルイアン Ho Rui An

現代美術、映画、パフォーマンス、理論の交差点で活動するアーティスト、ライター。レクチャーやエッセイ、映画などを通して、グローバル時代のさまざまな統治システム下での労働、テクノロジー、資本の関係性を探求している。これまでに、ディルイーヤ現代美術ビエンナーレ (サウジアラビア)、上海ビエンナーレ (中国)、バンコク・アート・ビエンナーレ (タイ)、光州ビエンナーレ (韓国)、コチ・ムジリス・ビエンナーレ (インド)、ポンピドゥー・センター (パリ・フランス)、世界文化の家 (ベルリン・ドイツ)、クンストハレ・ウィーン (オーストリア)、シンガポール国立美術館、山口情報芸術センター [YCAM] などでプロジェクトを行っている。



Photo by Olivia Kwok
Courtesy of National Arts Council Singapore

Asian Playwright Project

アヒラン・カルナハラン、神里雄大、上田久美子

[ウェリントン（ニュージーランド）、東京・奈良（日本）、モントリユ（フランス） | リーディング]

10.10（土）19:30 ○

10.11（日）12:00 ○／15:30 ●

10.12（月・祝）15:00 ●

○『バルパライソの長い坂をくだる話』

●『弔いのあした』

10.12（月・祝）16:30

フォーラム

会場 THEATRE E9 KYOTO

言語 日本語（英語字幕あり）

境界を越えて、世界を編み直す。

ディアスポラ文学の新たな地平



Photo by Sums Selvarajan

舞台に血肉を通わせ、まだ見ぬ世界を立ち上げる設計図となる戯曲の力。その可能性はいま、同時代のアジアでどのように発揮されているのか。「Asian Playwright Project」は、アジア・オセアニア地域の5つのパートナー（オーストラリア、香港、韓国、ニュージーランド、台湾）とKYOTO EXPERIMENTによる劇作家の交流プログラムだ。2026年度は「アジアのディアスポラ」をテーマに、生まれ育った土地を離れ、異国へ移住・定住した人々や子孫、彼らの記憶、コミュニティを描き出す2名の劇作家を紹介。それぞれの作品をリーディング公演の形式で上演する。

神里雄大とアヒラン・カルナハランは、互いに移民として国を渡った祖先や家族をルーツに持ち、異なる言語や文化を往還しながら独自の眼差しを育んできた。生活から近現代史までを照射する彼らの実践は、ディアスポラを周縁的な存在ではなく、世界を捉え直す「新たな中心」としての視座をわたしたちに拓いてくれることだろう。

『バルパライソの長い坂をくだる話』 作：神里雄大 演出：上田久美子 上演時間 85分（予定）

The Story of Descending the Long Slopes of Valparaíso

ペルー生まれ、神奈川育ちという自身のルーツと向きあい、南米や辺境の島々を旅した体験から本作を執筆した神里雄大。第62回岸田國士戯曲賞を受賞し、KYOTO EXPERIMENT 2017でスペイン語上演した戯曲を、今回は日本語で上演する。演出は鋭い観察眼と批評性で、人間の営みを描き出してきた上田久美子が手がける。

父の遺言に従い、チリ・バルパライソの海岸へ散骨にやってきた息子と母。そこではパラグアイや沖縄、小笠原など、ここではない土地の話が語られ、いくつもの生と死の痕跡が国境を越えて呼応する。

『弔いのあした』 作：アヒラン・カルナハラン 演出：神里雄大 上演時間 65分（予定）

The Mourning After

アオテアロア（ニュージーランド）の劇作家で、スリランカ系タミル人をルーツにもつアヒラン・カルナハランは、失われた土地の記憶をめぐる＜語りの集積＞によって物語を立ち上げる。主人公シェーカーは父の死後、家族の故郷であるスリランカを訪ねるが、見知った村は2004年の大津波によって跡形もなく押し流されていた。

瓦礫のなかを歩き続けるシェーカーは、親族が語る記憶の断片から、舞台上に“かつて存在した村”を呼び起こし、喪失のあとに残されたものを見つめる。本作では神里雄大が翻訳・演出を担当。自らも移民や越境を描いてきた表現者として、声なき声を掲げていく。

Asian Playwright Project フォーラム

日時：10.12（月・祝）16:30-18:00

スピーカー：アヒラン・カルナハラン、神里雄大、上田久美子

モデレーター：KYOTO EXPERIMENT 共同アーティスティック・ディレクター

料金：無料

言語：日本語・英語（逐次通訳あり）

アヒラン・カルナハラン Ahilan Karunaharan

スリランカ・タミル人家系に生まれ、アオテアロア（ニュージーランド）を拠点に舞台と映像の両方で分野横断的に活動するアーティスト。2003年にヴィクトリア大学ウェリントン、2007年にToi Whakaari - ニュージーランド演劇学校を卒業。その後、Tara Arts、ベルヴォア・ストリート劇場といった高い評価を得ている劇団とともに国際的に活動し、オークランド・アーツ・フェスティバル、シドニー・フェスティバル、アデレード・フェスティバルでそれぞれ上演された作品が称賛を浴びた。オークランド・シアター・カンパニー、オークランド・アーツ・フェスティバル、Silo Theatre、そしてKia Mau フェスティバルとの協働で先駆的な作品を発表している Agaram Productions の設立者であり、芸術監督を務める。また、南アジア劇作家フェスティバルやFirst World Problems（先進国の問題）といった新しい才能の発掘を目的とするイニシアチブ、グラスルーツ・クリエイティブによる移民コミュニティを対象としたワークショップなど、育成のための活動を立ち上げている。2018年には、ニュージーランドの卓越した劇作家による作品であるとの評価を受け、Bruce Mason 賞を受賞。2020年、Arts Foundation Laureate 賞受賞。



アヒラン・カルナハラン

神里雄大 Yudai Kamisato

1982年ペルー生まれ、神奈川育ち。拠点を特定の場所に限定せず、その時々環境に応じて創作場所は移動する。「移動」「移民」「観光」を主なテーマに、日本／世界各地を自ら旅して集めた物語や体験に着想を得て作品を創作している。国内外の演劇フェスティバルへ招聘多数。これまでの戯曲は韓国、香港、台湾、アメリカ、イギリスなどでも上演または出版されている。2006年『しっぽをつかまれた欲望』（作：パブロ＝ピカソ）で利賀演出家コンクール最優秀演出家賞受賞。KYOTO EXPERIMENT 2017で発表した『バルバライソの長い坂をくだる話』が2018年の第62回岸田國士戯曲賞を受賞。2016年10月より文化庁新進芸術家海外研修制度研修員としてアルゼンチン・ブエノスアイレスに1年間滞在。出版物として、戯曲集『バルバライソの長い坂をくだる話』（白水社）、ノンフィクション『越えていく人——南米、日系の若者たちをたずねて』（亜紀書房）がある。



神里雄大
 撮影：嶋田好孝

上田久美子 Kumiko Ueda

奈良県の古代集落にある農家に生まれる。京都大学文学部フランス語学フランス文学専修卒業後、東京での製菓会社勤務を経て、宝塚歌劇団演出部に入団し多くの話題作を手掛ける。2022年に退団し、文化庁新進芸術家海外研修制度により一年間フランスで研修。その後も日仏の拠点を往復しながら、芸術と娯楽、伝統と前衛、舞台と客席などあらゆる境界を問い直す創作活動を続けている。2023年、全国共同制作オペラ『道化師／田舎騎士道』（東京芸術劇場／愛知県芸術劇場）を演出。2025年、蒲田温泉宴会場にて宴会形式のパフォーマンス『寂しさにまつわる宴会』を主催。同年、SPAC 秋のシーズン『ハムレット』を潤色・演出。2024年度より公益財団法人セゾン文化財団セゾン・フェローⅡ。



上田久美子
 撮影：matron2023

キム・カンヨン、イ・ミンジン、パク・ミンヒ [ソウル（韓国） | パフォーマンス] ショーケース

10.16（金）17:00 ★

10.17（土）11:00 / 15:30

★ポスト・パフォーマンス・トーク

会場 ロームシアター京都 ノースホール

上演時間 160 分（予定）

*3 演目上演／途中転換休憩あり。

18 歳未満入場不可。床に座ってご覧いただく作品です。

共同主催：韓国国立現代美術館

本公演は、エルメスの支援を受けて実現しました。



慣れ親しんだコードや感覚の外へ。

韓国・舞台芸術の最前線を紹介する実験的ショーケース公演

「韓国国立現代美術館（MMCA）」の舞台芸術部門と KYOTO EXPERIMENT がコラボレーション。ソウルと京都、二つの都市で時代の潮流を鋭く映し出す表現を発信してきた両者が、最旬の才能を相互に紹介する。本年度は MMCA から 3 名が来日し、3 作品を一堂に鑑賞できるショーケース公演を実施する。

注目の新世代による表現から、キム・カンヨンのサウンド・パフォーマンスと、イ・ミンジンのソロダンス作品を紹介。また、伝統音楽のフィールドを越え、新しい聴覚的・空間的体験をもたらしてきたパク・ミンヒが 9 年ぶりにフェスティバルに登場し、新作を上演する。

キム・カンヨン 日本初演

隠された村

Hidden Village

上演時間 30 分

言語 日本語（英語字幕あり）

深海で長い年月を過ごした鳥は、貝のかたちをした神獣となる。その息吹が蜃気楼となる——。東アジアの神話から着想した本作は、メディアを横断しながら、忘れ去られたり、知覚が及ばぬまま残された世界の層や構造に光を当ててきたキム・カンヨンによるサウンドと映像を用いたパフォーマンス。貝殻に耳を当てたときのようにうごめく響きを手がかりに、観客は幻影とも深海とも、深淵な宇宙ともつかない感覚の外側にある世界を旅していく。

キム・カンヨン Kim Kangyeon

パフォーマンス、映像、サウンドを横断し、忘れられた、あるいは認識されない記憶の層や構造を明らかにする創作を行っている。この関心は、まず演劇によって表現されている。キムにとって、劇場は単なる場所ではなく、フィクションが現実投影され、想像力が圧倒的に有形な世界に重ねられる現場である。キムの活動において、劇場はまず、未完成のまま隠されたり消去されたりしたことが再び召喚される場として機能する。例えば漂流する言葉や身体を持たない幽霊といった見えないものの存在を再考し、舞台の中央に置くことで、感覚と認識の限界を広げる可能性を試そうとしている。

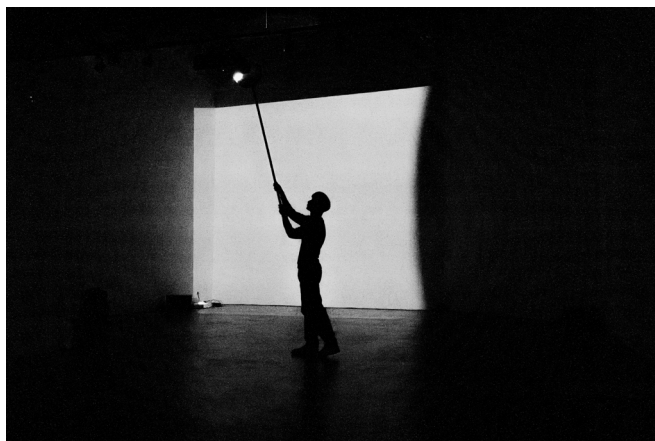
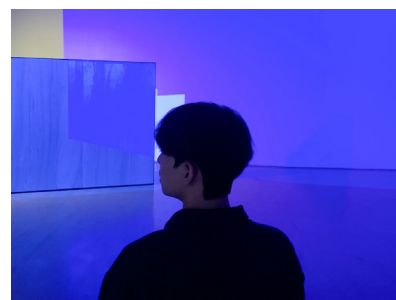


Photo by Lee Kangsun
Courtesy of Ob/scene Focus



©キム・カンヨン

イ・ミンジン 日本初演

地平線のそばで（あいかわらず）

Next to the Horizon (Still)

上演時間 40 分

言語 韓国語（日本語・英語字幕あり）

舞台上のダンサーは表現する主体であると同時に、観客に見られ、消費される対象でもある。であるならば、「踊る身体」は他者からの期待や表象を担うことの重圧から真に自由になれるのだろうか。イ・ミンジンはソロパフォーマンスを通してこのパラドクスと対峙し、自身の身体に投影されるイメージや意味づけ、思惑が揺れ動くさまを見つめる。一方、劇場という限られた水平空間では、イの身体は常に観客の視線にさらされ続ける。観客もまた、自らの欲望や思い込み、戸惑いと対峙し、「どう見るのか」を問われることとなる。



Photo by Lee Kangsun

イ・ミンジン Lee Minjin

ダンスを体現し、ダンスに立ち会い、ダンスを創る、パフォーマンスおよびダンスアーティスト。ダンサーが持つパフォーマンス性と主体性から始まるイの創作では、単に上演のための表現手段としてダンスに取り組むのではなく、舞台と日常、平凡と非凡を横断する感覚的探求の媒体としてダンスに向き合っている。形式としての振付ではなく、ダンスそのものの生命力と関係性に焦点を当て、時には一見するとダンスには見えないものを介すことでダンスの可能性の拡張を追求している。イの関心は可視化されない、あるいは容易に見過ごされてしまう感覚や周縁化された存在に向けられ、よく使われるコードや言葉の外にある動きをダンスの領域に取り込もうとしている。



Photo by Ryu Jinook

パク・ミンヒ 新作

内聴の舞台

A Stage of Inner Listening

上演時間 60 分（予定）

韓国の伝統音楽「ガゴク（歌曲）」を現代的な感性で再解釈してきたパク・ミンヒの最新作。ガゴクでは、言葉や音節の「間」に、恍惚ともいえる独特の時間感覚が宿る。それは現代の速度感とは対照をなし、わたしたちを未知なる音の体験へ導く。観客は薄暗闇のなかで耳を澄まし、目に見えない微かな響きや、沈黙の痕跡を全身で感じ取っていく。心で聴くとはどういうことなのだろうか。心はどこに宿るのだろうか。



© Moonsick Gang

パク・ミンヒ Park Minhee

韓国の旧重要文化遺産第 30 号に登録された歌曲（ガゴク、韓国の伝統的唱和法）のイスジャ（認定を受けた歌手）として、韓国伝統音楽の美学と構造を現代の感覚で再解釈するアーティスト。現代において伝統音楽を実践することの意味を問い続けながら、単に聴くという行為を超えた演者と観客の関係を、音楽的な意味で再定義する実験的な作品に取り組んでいる。パクの作品において、身体は音を出すただの楽器ではなく、音楽が命を持ち、共鳴する場所である。この変換を通して、他にはない音と空間の体験を観客に提供している。代表作は、『No Longer Gagok（歌曲失格）』シリーズ、『Hanging Bed』、『Wind Belows from the Mountain Where Spirits Gathered』など。



©パク・ミンヒ

アリス・リボル / Cia. REC [リオデジャネイロ（ブラジル） | ダンス] 日本初演

Adorno（装飾）

Adorno

10.17（土）17:00

10.18（日）15:00 ★

★ポスト・パフォーマンス・トーク

会場 京都府立府民ホール “アルティ”

上演時間 50 分

*14 歳以上推奨



Photo by Renato Mangolin

均質化する世界へ放たれる
 圧倒的な個のダイナミズム

パンデミック、紛争、生成 AI の興隆。パラダイムシフトの行き着く先で、新たな歴史を担う主体は誰か。確固たる個人か、画一化された「社会」という集団か、それとも——。本作はブラジルを拠点に、自国の政治や社会の矛盾に鋭く切り込んできたアリス・リボルの最新作。ファヴェーラ（スラム街）を拠点とするダンサーとのコレクティブ「Cia. REC」が、剥き出しの本能と身体をさらけ出し、この問いに応答する。

無機質な音が鳴り響く闇の中。生命の細胞、あるいは原子を思わせる無数の黒い風船から這い出すのは 6 つの身体だ。彼らはまるで波のように前進と後退を繰り返しながら、互いを求めて唸り、ふれ合い、絡みつく。他者や共同体とあることの歓びを謳歌する一方で、二つとない個の輝きを解き放っていく。

「Adorno」はポルトガル語で“装飾品”を意味する。ここでは個人のささやかな喜びや自己表現も想起させるが、音節に分解すると「～の中に痛みがある」とも読める。祝祭的な高揚に影を宿すそれは、進化した世界になお蔓延る格差や断絶だろうか。違いを抱えたまま生きることの難しさ、そこでもがき苦しむ心の叫びだろうか。

助成：ダンス リフレクションズ by ヴァン クリーフ & アーペル

DANCE
 REFLECTIONS
 BY
 VAN CLEEF & ARPELS

アリス・リボル Alice Ripoll / Cia. REC

振付家。リオデジャネイロ生まれ・在住。当初は心理学を学んでいたが、身体の可能性に対する好奇心から、また動きについて探求したいという欲求から、後にダンスに重点を移した。リオデジャネイロで知られる振付・身体機能訓練センターである Escola Angel Vianna を卒業後、振付家として活動を始める。彼女の作品では、ダンサー達が自分の経験や内なる記憶を表現できるような場を提供するリサーチを通して、コンテンポラリーダンスとブラジルのアーバングダンスを融合させる。リボルは、REC と SUAVE という 2 つのコレクティブを主宰。Festival Panorama（リオデジャネイロ）をはじめとするブラジルのフェスティバルや、クンステン・フェスティバル・デザール、ポンピドゥー・センター、ウィーン芸術週間など世界各地のフェスティバルや劇場で作品を上演している。KYOTO EXPERIMENT には、2023 年以降の 2 度目の参加となる。



Photo by Renato Mangolin

南野詩恵 / お寿司 [京都（日本） | 演劇] 新作

おすしえジプト

OsuShiEGypt

10.17（土）19:00

10.18（日）12:00 / 18:00 ☆

10.19（月）15:00 ★

☆お寿司トーク

南野が衣裳スタッフとして、京都芸術センターに洗濯機を置きたかった経験から、今回ついにゲストとして念願の洗濯機を迎え、トークが実現。

★ポスト・パフォーマンス・トーク

会場 京都芸術センター フリースペース

上演時間 120 分（予定）

言語 日本語（英語字幕あり）



* 未就学児入場不可。

自分の手と頭で考えてみる

信仰とか、あの世のこととか

バイオミラをつくるため、蘇りの国を目指す「わたし」——という SF めいたワンシチュエーションの会話劇『おすしえジプト』で観客を魅了し、2025 年の第 15 回せんがわ劇場演劇コンクール劇作家賞を受賞した南野詩恵。今回は、同作を第一幕「Before えジプト」とし、続編となる第二幕「After えジプト」を新たに創作。同時上演により、物語を完結へと導いていく。

「神や仏を信じきれない」という南野は、父なる神に代わり、事実である「生母・雅子」を舞台に上げ、スーパーで人間の構成要素を調達する。手探りで生と死を解明しようとする姿は、切実で大まじめだ。つづく新章では「死後の審判」の場が舞台となる。強い宗教観がなくとも、なぜだかあの世の存在を信じ、誰かに裁かれることを期待するわたしたち。だが一体、信仰とは何か。死後の物語を信じるとき、現世に変化はあるだろうか。生きている間にはわからないものと対峙するなかで、生きている間にしか持てない想像力が試される。

南野詩恵 / お寿司 Shie Minamino / OSUSHI

劇作家・演出家・衣裳作家。“必要とすれば誰もが立てる場”として舞台を捉え、あらゆる場所や人との創作・鑑賞の形を追求する。「私は舞台作品を通じて、悔しかったことをやり返しています。創作で復讐／復習を果たしているのです。生きていく上でやり直したいことや、考え直したいことを、暴力という方法ではなく、作品の力を使って舞台の上でやり直したいと考えています。」という信念のもと、個人の切実な問題を粘り強く捉え直し、その人自身の生を社会的応答へと昇華した作品を発表している。2016 年に立ち上げた舞台芸術団体「お寿司」では、作・演出・衣裳を南野が担当し、生地と文字を媒体として、演者の内外からアプローチを試みる。2019 年度ロームシアター京都×京都芸術センター U35 創造支援プログラム「KIPPU」採択。第 15 回せんがわ劇場演劇コンクール劇作家賞受賞。公益財団法人セゾン文化財団 2026 年度セゾン・フェロー I。



Photo by manami tanaka

Echoes Now

小林 颯、倉知朋之介、泉 宗良／うさぎの喘ぎ

ショーケース

10.21 (水) 18:00 ★

10.22 (木) 11:00 / 16:00 ★

★ポスト・パフォーマンス・トーク

10.21 (水) 18:00 の回

登壇者：川口万喜、堤 拓也、和田ながら

10.22 (木) 16:00 の回

登壇者：小林 颯、倉知朋之介、泉 宗良／うさぎの喘ぎ

会場 rome シアター京都 ノースホール

上演時間 135 分 (予定)

* 3 演目上演／途中転換休憩あり



© 竹内敦子(XS)

「Echoes Now」は、KYOTO EXPERIMENT が期待する次代のキュレーターとアーティストをショーケース形式で紹介するパフォーマンス・プログラム。活動分野において異なる背景を持つ3名のキュレーターによるプログラムでは、注目すべき実験的な表現を展開するアーティストとその作品を紹介する。

3年目となる今回は、rome シアター京都 ノースホールで上演。ブラックボックスならではの空間が、キュレーターやアーティストの発想をさらに刺激し、新たな挑戦を促す。川口と堤は、昨年キュレーションしたアーティストと再タッグでさらなる試みを行う。和田は、新たなアーティストを迎えプログラムを展開する。

助成：クリエイター支援基金



キュレーター：川口万喜、堤 拓也、和田ながら

川口万喜プログラム

小林 颯『舌湯 tong tang』[パフォーマンス]

堤 拓也プログラム

倉知朋之介『THE EARTH』[パフォーマンス]

和田ながらプログラム

泉 宗良／うさぎの喘ぎ『睡眠のパフォーマンス (実演)』[演劇]

キュレーター プロフィール

川口万喜 Maki Kawaguchi

成安造形大学芸術計画クラスを自主退学後、4年間農業に従事。2009年より大阪・中之島にあるコミュニティスペース「アートエリアBI」の事務局スタッフとして、国内アーティストの展覧会、音楽ライブ、パフォーマンス公演などに携わる。2013年、同施設の事務局を法人化し、理事兼事務局長を2023年まで務める。同年2月より京都市京セラ美術館事業企画推進室に広報担当として勤務。個人での活動として、多分野にわたるアーティストとの協働、展覧会の企画運営等を行う。



堤 拓也 Takuya Tsutsumi

1987年生まれ、関西拠点。キュレーター、グラフィックデザイナー。2019年アダム・ミツキエヴィチ大学大学院カルチュラル・スタディーズ専攻修了。展示空間の構成だけに限らず、パフォーマンスを含む1回的な体験機会を生み出す一方で、アジアを中心とした非制度的な実践に関心がある。これまでの主なディレクション／キュレーション実績に、シェアミーティング2「つぎつぎに（あつまっては）なりゆくいきほひ」（滋賀、2025）、MEET YOUR ART FESTIVAL 2024「SSS: Super Spectrum Specification」（東京）、山下拓也個展「闇が抱える光：熊、ムンク、チーズバーガー、他」（台北、2023）、国際芸術祭「あいち 2022」（愛知）など。山中suplex 共同プログラムディレクター。ICA 京都プログラム・ディレクター／京都芸術大学准教授。



撮影：前谷 開

和田ながら Nagara Wada

京都造形芸術大学（現・京都芸術大学）芸術学部映像・舞台芸術学科卒業、同大学大学院芸術研究科修士課程修了。2011年2月に自身のユニット「したため」を立ち上げ、京都を拠点に演出家として活動を始める。演技という行為に強い関心を持ち、テキストやモチーフを接写するように読み解いていくことで、作品ごとに固有の演技の文法の構築をめざしている。美術、写真、建築、音楽、彫刻、ダンスなど、異なる領域のアーティストとも演劇を媒介に対話し、協働作業による作品制作に積極的に取り組む。2018年より多角的アートのスペース・UrBANGUILD ブッキングスタッフとして俳優にフォーカスしたパフォーマンスシリーズ「3CASTS」を企画。2025-26年度セゾン文化財団セゾン・フェローI。



撮影：守屋友樹

[川口万喜プログラム]

小林 颯 [京都（日本） | パフォーマンス] 新作

舌湯 tong tang

上演時間 30 分（予定）

言語 日本語・台湾語・中国語（日本語・英語字幕あり）



ラジオ放送の先駆者で三極真空管の発明者であるリー・ド・フォレストはマス・ラジオを「見えない空気の帝国」と表現した。電気を帯びた空気の帝国は、たちまち世界に広がり、人々の意識を統合し、声を奪っていった。1920 年代のことだった。

ところが戦後、帝国の力が及ばない電波が発生する。日本ではミニ FM、台湾では地下ラジオだった。それは権力や資本主義と深く癒着したメディアを自分たちの手に取り戻す動きであり、とりわけ台湾では、個人が言葉を持っていることを示す行為であった。

かねてより、何者かになっていく過程で発せられる「移動する声」を追い求めていた小林 颯は、台湾の地下ラジオ運動に出会い、日本統治時代のラジオ放送を知り、ジェンダーの境界を越えていく同志文学へと行き着いた。この作品は、ファシズムの象徴から個人の連帯の支柱へと移り変わるラジオを用いて、ジェンダーや言語といった境界を越える移動者のアイデンティティの揺らぎを捉えようという実験である。

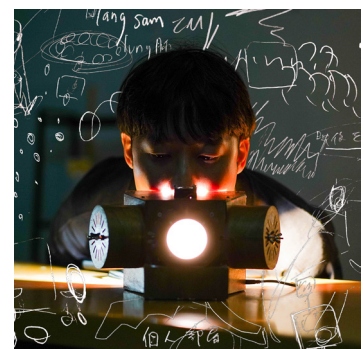
キュレーターコメント

「あーあーあー 聞こえますか？ 聞こえますか？ あーあーあー」

人と話すことが怖いという小林は、装置を介して他者と会話する。繋がるかどうか不確かで不安定な電波を使い、目の前にいる他者や見えない他者と会話を試みる。時折、通じているかどうか確認しながらも、すぐに途切れてしまう微弱な電波を介して、声を発信し続ける。その声を言葉にしてスマホで送れば何文字だろうか。それでも小林は、電波を発する装置を手に、送信と受信を繰り返す。その集積の果てに何かがあるわけではなく、その集積の過程で、声と声が出会い、何かが混ざり合っていく状況を期待しているのだ。

小林 颯 hayate kobayashi

1995 年北海道生まれ。東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了。2020 年から 2024 年まで、江副記念リクルート財団スカラシップを経てドイツ・ベルリンへ渡独。2024 年にベルリン芸術大学大学院アートアンドメディア科を修了。装置と映像を通じて、エクソフォニー（「母語の外にある状態一般」の意）の新たな語りの形を再考している。近作では、よそ者／移動者の観点から、移動者の言語感覚を主題に扱う。主な個展に「Appeartus #1」（千鳥文化ホール、大阪、2026）、「ポリパロール」（アートセンター BUG、東京、2024）など。



[堤 拓也プログラム]

倉知朋之介 [東京（日本） | パフォーマンス] 新作

THE EARTH

上演時間 35 分（予定）

言語 日本語、ペラペラ語*（英語字幕あり）

* 独自の言語



Photo by Nanako Kobayashi

コミカルで、時に間拔けで、悪趣味で、どこか内輪ノリな空気をまとった短編映像を数多く制作してきた倉知朋之介。はじめての演劇作品となった前作『SOFTBOYS 〜だってまだまだ今来たばっか！〜』では、男性アイドルグループの一人が突如病に倒れ、そこから回復していくためのストーリーを「文字通り」に演出した。その後、これまで扱ってきた関心は維持しつつも、川の土手や、誰かの隣りでパフォーマンス作品を発表するようになる。本作ではその関心をさらに拡張し、ノースホール全体を用いた回遊型のパフォーマンス・インスタレーションに挑戦。これまで映像空間のなかで培ってきた方法論をそのまま劇場空間へ持ち込むことを試みる。

キュレーターコメント

Echoes Now という枠組で倉知くんを選んだのはこれで二度目である。これまでの自分の仕事を振り返ってみると、同じアーティストと2年連続で協働することはあまりない。ではなぜまた選んだのか白状すると、前作『SOFTBOYS 〜だってまだまだ今来たばっか！〜』への満足度はありつつも、なんだか消化不良のような感覚が残ったからだ。いつもこちらの提案に全面的に頷きつつも、実は何を考えているのかよくわからない倉知くんは、まだまだ変で実験的なパフォーマンスをつくってくれそうな気がしている。

倉知朋之介 Tomonosuke Kurachi

倉知朋之介は、エンターテインメントへの批評性のもと自らが主演・演出を手がけた映像インスタレーションを制作している。TVドラマ、MV、あるいは映画といった広く知られた娯楽を引用して、真似るという原初的な誇張により笑いを巧みに引き起こす。日用品を取り入れた舞台装置や衣装を即席的に作り、日常世界を愉快的なショウへと変容させて、自らが即興的にリズムカルな音を発することで意味／無意味のおかしさを暴露していく。倉知は笑いを基底とした芸術表現によって、近代以降に生まれた娯楽や人間性を実践的に自問する。



撮影：西田香織

[和田ながらプログラム]

泉 宗良 / うさぎの喘ギ [大阪（日本） | 演劇]

睡眠のパフォーマンス（実演）

Performing the Performance of Sleep

上演時間 50 分（予定）

言語 日本語（英語字幕あり）



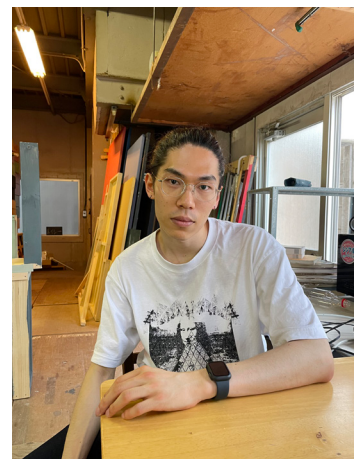
日本は先進国の中でもっとも睡眠時間が短く、睡眠負債による生産性の低下は甚大な経済的損失すら招いている——この憂鬱な事実、『睡眠のパフォーマンス（実演）』は、演劇ならではのアプローチで応答する。泉宗良が作・演出をつとめるうさぎの喘ギは、「私は私」といったトートロジー（同語反復）で台詞が構成されている『いみいみ』や、なるべく早いゲームクリアにトライする RTA（リアルタイムアタック）を演劇上演に応用してシェイクスピアの戯曲を攻略する『演劇 RTA ハムレット』など、ユニークかつ実験性に富んだ作品を発表してきた。今回は、2023 年に初演された『睡眠のパフォーマンス（実演）』をブラッシュアップして上演する。俳優が、万全の支度をし、観客の眼前で「質の高い眠り」を実演する。世界で最も眠らない、あるいは、眠れないこの国で。

キュレーターコメント

うさぎの喘ギの作品を体験するたびに、演劇とは「時間」を試す形式である、と気づかされる。どこにいてもあらゆるアップデートが即時的に同期し、タイパを価値基準と見なす現代社会の時間感覚を、俳優の身体と演技が批評していくさまには思わずにやりと、そしてひやりとしてしまう。ところで、睡眠を実演する俳優は果たして演技をしているのだろうか？ タヌキ寝入りは、私たちが子どものころに最初に覚えた演技のひとつだ。今回のうさぎの喘ギは、演劇における「演技」もまた、試そうとしている。

泉 宗良 / うさぎの喘ギ Sora Izumi / Usagi no Aegi

劇作家・演出家。1996 年大阪生まれ。大阪教育大学 教育学部を卒業。在学中にうさぎの喘ギを旗揚げ。以降殆どの作品で作・演出を担当する。2022 年よりウイングフィールドスタッフ。劇評企画や、安全な稽古場運営のためのワークショップ企画等を立ち上げ、後進の育成にも力を入れる。NPO 法人大阪現代舞台芸術協会（愛称：DIVE）理事。西陽<ニシビ>プロジェクトメンバー。第 23 回 AAF 戯曲賞大賞受賞。



山下 残 & ニャー・トゥイエン with プロジェクト・デイ・サン

[京都（日本）、ハノイ・ホーチミン（ベトナム） | ダンス] 新作

giọt-giọt | しずくたち

giọt-giọt | shizukutachi

10.22（木）14:00

10.23（金）19:00 ★

10.24（土）11:00

10.25（日） 6:00 / 12:00

★ポスト・パフォーマンス・トーク

会場 京都芸術センター 講堂

上演時間 60-90 分（予定）

* 未就学児入場不可。開演後は途中入場不可。
畳に座ってご覧いただく作品です。



京都、ハノイ、ホーチミン。
詩と身体の交感から本を編み、本を踊る

日本とベトナムの3都市で活動するアーティストが出会い、対話や詩、ダンスノーターション（舞踊譜）を記録した「本」を編み上げ、そこから舞台作品を立ち上げるプロジェクト。表現や言論の自由への希求とともに、新たなクリエイションが生まれる軌跡を映し出す試みだ。

創作を共にするのは、振付の方法論に“言語”を取り入れてきた振付家の山下残と、ベトナム・ハノイを拠点に活動する詩人・作家で、独立系出版コレクティブ「Ajar Press」の共同創設者であるニャー・トゥイエン、ホーチミンのアーティストとプロデューサーによるコレクティブのプロジェクト・デイ・サン。彼らの鮮烈な感性が響き合う創作のプロセスに、ホーチミンでのリサーチを通して出会った新世代の表現者たちの実践やグルーブも加わっていく。

タイトルの「giọt-giọt」はベトナム語で一滴一滴のしずく、ぽたぽたと、という意味。静寂のなかで観客がめくる本、その一枚一枚のページの音が、まるで水滴のようなりズムを刻む。その合奏に導かれ、ダンスや朗読、対話の時間がひらかれる。

主催：KYOTO EXPERIMENT、国際交流基金
共同製作：KYOTO EXPERIMENT、国際交流基金
* 令和8年度国際交流基金舞台芸術国際共同制作事業として制作
KYOTO EXPERIMENT × 国際交流基金「Sequence」事業



山下 残 Zan Yamashita

1970 年大阪府生まれ。代表作に、出演者による人生の大切な一冊をダンスとして紹介する『詩の朗読』、100 ページの本を配り観客がページをめくりながら舞台が進行する『そこに書いてある』、スクリーンに映写される呼吸〈すう・はく〉の記号と俳句の引用から成るテキストを身体とリンクさせる『せきをしてもひとり』、ダンス作品をどうやって作ったらいのか分からない毎日の声の記録『横浜滞在』、揺れる舞台装置の上で4人のダンサーが振付の自由と不自由に挑む『船乗りたち』、本物の線路の上を往来し断片から成る世界の事象を妄想的につぶやく『大行進』、打ち捨てられたゴミを集めて繰り広げる身体コミュニケーションのネットワーク『庭みたいなもの』、インドネシア・バリ島からのオンラインレッスンを通じて先生からバリ舞踊の教えを請う『悪霊への道』、伝承の現場を疑似ドキュメントする『左京区民族舞踊』、無血革命と呼ばれたマレーシアの政権交代を現地にて選挙立候補者と共に行動・記録・再現をした『GEI4』、身振りや台詞の全ては対面する相手からの承諾を得てこそ実行可能な『インビテーション』等々。



ニャー・トゥイエン Nhã Thuýn

ニャー・トゥイエンは、ベトナムのハノイを拠点に活動する詩人、作家、編集者。20 年間にわたり、執筆と本の出版に注力しながら、朗読会や上演、詩の交換、交流にも活動を広げている。何冊もの著作があり、英訳されたものに『呼吸する言葉、別の場所の生き物』(原題『tử thờ, những người lạ』、2015)、『(非) 殉教者—ベトナムの詩の世界で (自ら) 消えた存在』(原題『bất \ tuần: những hiện diện [tự:] vắng trong thơ Việt』、2019)、『狂気を隠さないで』(原題『đừng giấu cơn điên』、2024 年) がある。2014 年には、オンラインと紙面上で詩の場所を創り、時には小さな集まりも開催するバイリンガルな小規模出版活動として、AJAR を共同設立した。彼女の作品は、「Asymptote」「Cordite Poetry Review」「The Margins」「Words Without Borders」「Jacket 2」「Gulf Coast」「The Kenyon Review」「Modern Poetry in Translation」といった専門誌に掲載されている。また、詩の作品は英語、ドイツ語、オランダ語に翻訳されており、様々なカフェやアートスペースで朗読上演された。また、アジア太平洋地域やイギリス、ヨーロッパ各地の国際フェスティバルにも出演している。2022 年のロッテルダム国際詩祭と 2023 年 DAAD (ドイツ学術交流会) ベルリン芸術家プログラムでの受賞歴を持つ。現在は、RMIT 大学 (オーストラリア) での実践研究に参加するとともに、次の詩集「水の味覚」(原題『vị nước』) の刊行を待っている。



Photo by Yen Duong

プロジェクト・デイ・サン Project Đầy Sàn

プロジェクト・デイ・サン (PDS) は、ホーチミン市にて行われている協働型プロジェクトで、新進気鋭のベトナム人パフォーマンス・アーティストたちによる学び、協働、実験を推進している。2024 年に、Đoàn Thanh Toàn、グエン・ハイ・イエン (レッド)、Nhật Huỳnh-Vũ、Trà Nguyễn といった独立系のアーティストやプロデューサーが、ゲーテ・インスティトゥート・ベトナム | ホーチミン市の支援を受けて設立した。プロジェクト・デイ・サンの文字通りの意味は「地面を押す」であり、追求すべきモデルやトレーニングの機会、そして方法が欠如しているという現状認識のもと、すでにあるものを批評的な姿勢で活用するための道具を提案している。

PDS は二つの特徴的でありながら補完的な要素によって、成り立っている。一つ目は、協働型の能力開発ワークショップ「Rèn」(鍛造する)。もう一つは、ワークインプログレス過程にある作品のためのインキュベーションとショーケースのプログラム「Dựng」(構築する)で、ベトナム人アーティストのために、パフォーマンス創作の道具を獲得するための様々なチャンネル、そして観客に向けて上演を行う上での他にはないサポートを提供している。

これまでの2年間、PDS では、プロジェクト・アドバイザーとして、ワークショップ・コーディネーターとして、アーティストとして、あるいは共同プロデューサーとして、ササビン・シリワーニット (タイ) やマーク・テ (マレーシア)、Lina Oanh Nguyễn (ドイツ)、Young Boys Dancing Group (スイス)、contact Gonzo (日本) などの国際的なアーティストと協働している。



Photo by Mini Creative Studio

石原菜々子、金子仁司 / kondaba [大阪（日本） | 演劇] 新作

コンダバ川日誌

Daily records of River kondaba

10.22（木）19:00

10.23（金）15:00 ★

10.24（土）13:30 / 18:00

10.25（日）15:00

★ポスト・パフォーマンス・トーク

会場 京都市呉竹文化センター 創造活動室

上演時間 90 分（予定）

言語 日本語（英語字幕あり）



撮影：中谷利明

京都と大阪を結ぶ川から
都市の営みを眺めてみる

卸売市場から木工所、造船所の跡地に廃墟まで。大阪という都市の中に上演の場を見出し、その場が持つ記憶や匂い、手ざわりも編み込んだ演劇作品を手がけてきた kondaba の石原菜々子と金子仁司。二人は現在、京都市伏見区の「中書島（ちゅうしょじま）」を起点に、新作に向けたフィールドワークを展開中だ。

なぜ中書島か？ といえば、ここがかつての京都の玄関口で、大阪と京都をつなぐ結節点であったゆえ。ふたつの都市は関西の大動脈である淀川水系を通してつながり、国内最大の川港（伏見港）が開かれた歴史も。石原と金子は自身の身体感覚をアンテナに、上流や下流へ移動したり、河川敷に身を置いて生活者に擬態しながら、土地の誕生から近代化、現代へ連なる時間をたどる。さらに、その先の海へと想像をめぐらせる演劇を描き出す。

会場から旧港エリアへは徒歩 15 分なので、上演前後に街をめぐるのがおすすめです。なお kondaba は、本年度のリサーチプログラム「Kansai Studies」（p.30）のリサーチャーにも選定されている。創作中の二人の思考や発見、メモなどが随時共有されていくため、制作の舞台裏や完成までのプロセスも楽しんでほしい。

kondaba

2018 年 1 月に劇団維新派の元劇団員であったメンバーによって結成。現在、石原菜々子と金子仁司の 2 名が所属。「場所」と「遊び」を創作のテーマに掲げ、都市の中に上演場所を探し、その場所で「遊ぶ」ことから創作をスタートする。その場所の柱や壁、天井などの構造や質感から場所の持つ規則性や特徴を読み取り、身体と場所との関係性を探ることを「遊び」と呼ぶ。遊びから得た身体性とその土地が積み重ねてきた時間のリサーチ、地域住民への聞き取りなどをもとに作品を創作する。これまでに細野ビルヂング、生野地方卸売市場跡地、大内木工所跡地、Creative Center Osaka（名村造船所旧大阪工場跡地）にて公演。2025 年に上演した『棟梁ソルネス』（演出：kondaba、作：ヘンリック・イブセン）では第四回関西えんげき大賞優秀作品賞受賞。



撮影：中谷利明

Kansai Studies

石原菜々子、金子仁司 / kondaba [大阪（日本） | 展示]

コンダバ川の地形図

Topographical Map of River kondaba

10.3（土）-10.25（日）10:00-20:00

会場 京都芸術センター ギャラリー南



撮影：中谷利明

リサーチから作品ができるまで。
ひらかれた実験と思考のプロセスから見えるものとは？

Kansai Studies は、フェスティバルが根ざす関西圏を対象としたリサーチプログラム。アーティストが行うフィールドワークを通して、身近な地域が内包する文化や風土に光を当て、これからの芸術表現の「原石」としていくものだ。2026年度は、京都・中書島（ちゅうしょじま）を舞台にした新作演劇『コンダバ川日誌』（p.29）を上演する kondaba の石原菜々子と金子仁司が登場。壮大な野外劇で知られる劇団「維新派」出身の二人が実践してきた、地域リサーチから作品を立ち上げるプロセスに迫る。

「島」という字を冠した地名から、すでに物語の気配を感じるように、中書島は豊臣秀吉が築いた伏見城の旧城下町であり、大阪湾へつながる淀川の水運を支えた港湾都市としての歴史も持つ。「淀川水系の成り立ちに興味があります。それから河川敷という場の特殊性、「淀川ワンド」と呼ばれる地形特有のビオトープについても調べたい」と、初期のリサーチ構想を語った二人。日々のフィールドワークの様子は note にて随時公開中。また、活動報告としての展示を京都芸術センターで開催する。リサーチから作品化に至るまでの思考と実践の一端を、観客がリアルタイムで目撃できるのは今回が初となる。どうかお見逃しなく！

**KANSAI
STUDIES**

Kansai Studies note サイト

https://note.com/kansaistudies_26



📖 Super Knowledge for the Future [SKF]

📖 プレイベント

トーク

KEX2026 キーワードよもやま夜話

9.15 (火) 19:00-20:30

会場：BnA Alter Museum

ゲスト：小山田 徹（京都市立芸術大学理事長・学長）、
 吉岡 洋（京都芸術大学文明哲学研究所・所長）

聞き手：KYOTO EXPERIMENT 共同アーティスティック・ディレクター

料金：1,000 円（1ドリンク付き）



小山田 徹

人間にとって最古のメディアであり、時に抵抗の手段にもなってきた石。何気ないものや大切なものをひそやかに受け止め、身体と共に遠くへと運ぶポケット。フェスティバルの開幕もいよいよ迫る夜に、美術家の小山田徹と美学者の吉岡洋による対談で今年のキーワード「ポケットに石ころ」を丹念にときほぐしていく。会期を迎える前のウォームアップをぜひ一緒に。



吉岡 洋

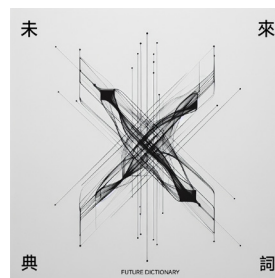
📖 Future Dictionary

展示

10.3 (土) -10.25 (日) 10:00-20:00

会場：京都芸術センター 図書室

料金：無料



© AI 作成

アーティストのアイディアが凝縮された単語を収集し、新しい辞書をつくるプロジェクト「Future Dictionary（フューチャー・ディクショナリー）」。「翻訳の過程で失われてしまう微細なニュアンスも含めて共有してきたこの企画は、2023年に上海拠点のキュレーター、オフエリア・ジアダイ・ホァンが発案し、KYOTO EXPERIMENTと協働で展開してきた。今回は、創作にまつわるさまざまな言葉が収蔵されている京都芸術センターの図書室で、アジア圏のアーティストたちと編んできたアーカイブを紹介する展覧会をひらく。

企画：オフエリア・ジアダイ・ホァン
 協力：KYOTO EXPERIMENT

📖 ティアゴ・ロドリゲス アーティスト・トーク

トーク

10.4 (日) 11:00-12:00

会場：関西日仏学館（京都）1F 稲畑ホール

ゲスト：ティアゴ・ロドリゲス

言語：日本語、フランス語（逐次通訳あり）

料金：無料



Photo by Christophe Raynaud de Lage

現代演劇の第一線で活躍し、フランスを代表するアヴィニョン演劇祭の芸術監督も務めるポルトガルの劇作家・演出家、ティアゴ・ロドリゲス。昨年のフェスティバルでは国際人道支援の現場に取材してロドリゲスが執筆した戯曲『不可能の限りにおいて』をリーディング公演として紹介し、今年は彼自身の演出・出演による『By Heart—心で覚える』の上演が実現する。本トークではロドリゲスの作品をひもときながら、創作の原点や多彩なアプローチに迫る。

主催：KYOTO EXPERIMENT、関西日仏学館



📖 ホー・ルイアン アーティスト・トーク トーク

10.7 (水) 18:00-19:30

会場：京都芸術劇場 春秋座 ホワイエ

ゲスト：ホー・ルイアン

聞き手：KYOTO EXPERIMENT 共同アーティスティック・ディレクター

言語：日本語・英語（逐次通訳あり）

料金：無料



Photo by Olivia Kwok
 Courtesy of National Arts Council Singapore

膨大なアーカイブをもとに緻密なリサーチを積み重ねるホー・ルイアンは、世にあまねく視覚文化を引用しながら、歴史と権力に対する鋭い批評を投げかけてきた。ホー自身が独自の手法について語るこのトークでは、今回上演するレクチャー・パフォーマンス『歴史のすがた／知能の立脚点』を着想したきっかけやプロセスを中心に、これまでの活動についてもじっくり掘り下げて聞いていく。

主催：KYOTO EXPERIMENT、国際交流基金
 KYOTO EXPERIMENT × 国際交流基金「Sequence」事業



📖 「TOPOS：まなびあう庭としての芸術大学」共同企画 上映会&トーク

映画『理大囲城』上映会&トーク

10.8 (木) 17:30-20:45

会場：京都市立芸術大学 講義室Ⅰ (C棟Ⅰ階)

聞き手：藤田瑞穂（京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA チーフキュレーター／プログラムディレクター）、

KYOTO EXPERIMENT 共同アーティスティック・ディレクター

料金：無料



©Hong Kong Documentary Filmmakers

2019年に香港で起きた民主化運動の際、警察に包囲され、香港理工大学に籠城したデモ隊の姿を克明に記録した映画『理大囲城』を上映する。上映後のトークを通して、あの時、香港で何が起きていたのか、そしてあの出来事がどのような影響を与えたのかを探る。

配給会社：Cinema Drifters、大福
 主催：KYOTO EXPERIMENT、京都市立芸術大学
 助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（芸術家等人材育成））、独立行政法人日本芸術文化振興会、一般財団法人地域創造「記憶との対話—学び合いの場としての舞台芸術祭」

📖 「TOPOS：まなびあう庭としての芸術大学」共同企画 ショーイング

カルメン・リー&チュンシン・オー／シアター・デュ・プーレ
 ワークショップ成果発表会

10.18 (日) 14:00-15:00

会場：京都市立芸術大学 多目的ギャラリー (C棟6階)

ファシリテーター：カルメン・リー、チュンシン・オー

料金：無料



Photo by Thomas Lenden

オブジェクトと身体の関係性を演劇的に探究してきたカルメン・リー&チュンシン・オー／シアター・デュ・プーレが、『私書箱 No.211』終演後も京都に滞在し、集中ワークショップを開講。本イベントでは、その成果を披露する。人間と非人間の間に生まれるインタラクティブな場面を見逃さない彼らの方法論が、参加者と共にどんな化学反応を生み出すのか、ぜひ会場で見届けよう。

主催：KYOTO EXPERIMENT、京都市立芸術大学
 助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（芸術家等人材育成））、独立行政法人日本芸術文化振興会、一般財団法人地域創造「記憶との対話—学び合いの場としての舞台芸術祭」

📖 ポケットの中の服飾史 レクチャー

レクチャー

10.13 (火) 19:00-20:30

会場：BnA Alter Museum

講師：成実弘至（京都女子大学教授／社会学、ファッション研究）

料金：1,000 円（1 ドリンク付き）



成実弘至
撮影：大森克己

私たちが今、服についていることを当たり前と思っているポケットは、いったいいつごろ生まれ、どんな変化を経て現在の形になっていったのだろうか？ 本レクチャーでは、社会学・ファッション研究を専門にする成実弘至をナビゲーターに、「ポケット」を糸口に服飾の歴史をたどる。ふだん何気なく使っているポケットの背景を知ること、毎日の装いに新しい視点が加わるかも。

📖 ケアと（エクスペリメンタルな！）表現のあいだで

トーク

10.14 (水) 19:00-20:30

会場：京都芸術センター ミーティングルーム 2

ゲスト：森下静香（たんぽぽの家／Good Job！センター香芝）

聞き手：KYOTO EXPERIMENT 共同アーティスト・ディレクター

料金：無料



撮影：仲川あい

奈良県を拠点にアートとケアの視点から多様なプロジェクトを展開するたんぽぽの家は、2024 年に障害のあるパフォーマーを公募する「S-I グランプリ」を始動。障害、ショー、スタート、スターなどの意味を込めた「S」を冠に、近畿各地から集まった新たな才能と既存の価値観を覆す作品を紹介している。ケアと実験的な身体表現のあいだでいま何が生まれつつあるのか？ たんぽぽの家の取り組みを中心に、表現の現在地をめぐるトーク。

協力：一般財団法人たんぽぽの家

📖 ロックバランシングワークショップ 入門編

ワークショップ

10.18 (日) 10:30-12:00

会場：ロームシアター京都 IF プロムナード

講師：池西大輔（ロックバランシング・アーティスト）

料金：500 円



日々、鴨川で実践を重ねているロックバランシング・アーティストの池西大輔を講師に招き、ロックバランシングの入門編ワークショップを実施する。ひとつひとつ異なる形をもつ石に触れ、慎重に積みあげ、世界で唯一のフォルムが立ちあがっていく……。石の重心を見極めることの難しさ、息を整えバランスに向き合う過程、そして、自分だけの作品ができあがることの喜びを体験して。

主催：KYOTO EXPERIMENT、ロームシアター京都（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）

📄 批評プロジェクト 2026 公募

メンター：梅山いつき（演劇研究者）

応募締切：11.23（月）23:59

対象演目：石原菜々子、金子仁司／kondaba『コンダバ川日誌』

実験的な舞台芸術作品の批評・評論を学ぶプロジェクト。参加要件は、対象演目のkondaba『コンダバ川日誌』を鑑賞し、レビューを書いて応募すること。審査を経て選出された若干名は演劇研究者の梅山いつきによる個別指導を受け、内容をブラッシュアップ。完成原稿は英語への翻訳も行い、日英共にKYOTO EXPERIMENTのウェブサイトに掲載される。また、多くの劇評が集まる「紙背」WEBにも掲載。芸術批評やライティングを学んでみたい人はぜひ挑戦を！



撮影：中谷利明

助成：クリエイター支援基金
協力：紙背



KYOTO EXPERIMENT × 国際交流基金「Sequence」

KYOTO EXPERIMENT は、独立行政法人国際交流基金（The Japan Foundation、JF）との共同事業として「Sequence（シーケンス）」を2025年度より開始しています。

「Sequence」は、ASEAN 地域と日本の舞台芸術分野におけるアーティストおよび観客の人的交流による次代の人材育成を目的とした事業で、2025～2027年の3年間にわたり実施するプロジェクトです。日本とASEAN 地域の次代を担うアーティストのインキュベーション・プログラム、ASEAN 地域を拠点とするアーティストによるパフォーマンス作品の招聘公演および交流プログラム、ASEAN 地域と日本のアーティストによる国際共同制作プログラムの3つのプログラムにより展開しています。

「Sequence」には、ひとつの大きな物語を語る／作るのではなく、断片的なシーンを積み重ねることで、これからのASEAN 地域と日本における舞台芸術の展開を作っていく、という意を込めています。

日本とASEAN 地域を含むアジア地域には、非常に多様な文化とさまざまな社会・政治背景があります。本事業では、それらをまとめるような大きな物語を作ることよりも、大きな物語からはこぼれ落ちてしまう、断片的かもしれないひとつひとつのものと視点とをすくいあげながら、交流とつながりを深めていくことにフォーカスしていきます。複数年にわたる「Sequence」が展開するなかで、日本とASEAN 地域を含むアジア地域の文脈を表現の起点として捉えなおし、その視点から舞台芸術における事象や考えをつなぐことで、次代の人材を育成していくことを目指しています。

2026年度は、本事業の枠組みとして、下記3プログラムを実施します。

- ・ホー・ルイアンによるパフォーマンス作品『歴史のすがた／知能の立脚点』の上演およびトークプログラム（詳細はp.15、32）
- ・山下 残&ニャー・トゥイエン with プロジェクト・デイ・サン
『giot-giot | しずくたち』国際共同制作（詳細はp.27）
- ・日本、タイ、東南アジアの次代を担うアーティストのインキュベーション・プログラム「Shifting Points」
（主催：KYOTO EXPERIMENT、BIPAM、国際交流基金）
フィールドワーク予定：2026年11-12月 ベトナム、2027年3月 タイ
参加アーティスト（ファーストネーム・アルファベット順）：
アンナスタシヤ・フェリナ（インドネシア）、玉井秀和（日本）、ホアン・アイン・グエン（ベトナム）、
ボンサトーン・プッタコート（タイ）、タナボン・アッカワタンユー（タイ）、内田結花（日本）

国際交流基金「次世代共創パートナーシップ－文化のWA2.0－」

独立行政法人国際交流基金は、総合的に国際文化交流を実施する日本で唯一の専門機関です。

日本ASEAN 友好協力50周年（2023年）を契機に、日本とASEAN の次世代の交流促進と人材育成を目的とする包括的な人的交流事業「次世代共創パートナーシップ－文化のWA2.0－」を、2025年度から10年にわたり集中的に実施していきます。このプロジェクトは、2013年から約10年間にわたって数多くの交流事業をおこなった「文化のWA（和・環・輪）プロジェクト～知り合うアジア～」を発展的に継続するものです。日本語パートナーズ事業と、双方向の知的・文化交流事業を軸に、心と心のふれあいを通じて、多層的な人的ネットワークの強化や、対象地域と日本との将来にわたる強い信頼関係の構築を目指しています。

国際交流基金公式ウェブサイト：<https://www.jpf.go.jp/>

WA2.0 ウェブサイト：<https://www.jpf.go.jp/j/project/special/bunkanowa2/index.html>

KYOTO EXPERIMENT × 国際交流基金「Sequence」
共同主催：KYOTO EXPERIMENT、国際交流基金

KYOTO EXPERIMENT

JAPAN FOUNDATION
国際交流基金

🔗 フリンジ：More Experiments

フェスティバル開催期間中に京都で発表される作品を一挙に紹介する「フリンジ：More Experiments」。演劇・ダンス・音楽・朗読・パフォーマンス・展示など、ジャンル不問の公募で集まった作品を紹介します！

*参加団体は8月中旬にウェブサイトでお知らせします。



10.1（木）-10.31（土）

会場：京都府下各所

🔗 ミーティングポイント

「ミーティングポイント」は、フェスティバルと観客をつなぐ交流拠点&インフォメーションセンターです。四条河原町や木屋町にほど近いアートホテル「BnA Alter Museum（ビーエヌエー オルター ミュージウム）」とロームシアター京都の中庭「ローム・スクエア」の2拠点が会期中にオープンします。いずれの会場でも、マガジンやフライヤーの配布、オリジナルグッズの販売を行います。BnA Alter Museumでは、SKFのイベントも開催。さらに、Bar タイムには、この期間限定のオリジナルドリンクもお目見えするので、観劇後にもぜひ立ち寄りください。どちらの会場にも、フェスティバルに関わるメンバーも訪れます。観劇の前後や、まち歩きの途中に、ぜひお越しください！

*2会場ともに入場無料。

🔗 ミーティングポイント BnA Alter Museum

開場日時：10.3（土）-10.25（日）11:00-24:00

*18:00-24:00 は Bar タイム（要1ドリンクオーダー / LO 23:30）
イベント等により臨時休業場合があります。

「泊まれるアート」をコンセプトに、クリエイティブ集団「BnA」が手がけた10階建てのアートホテル。

16組のアーティストが手がけた31部屋に加え、ギャラリーやショップ、カフェ、バーもあり、多彩な展覧会やイベントを展開中。関西のカルチャー発信のハブとしても注目されています！フェスティバル中に宿泊すると、うれしい特典も。



ミーティングポイント BnA Alter Museum
Photo by Yuki Moriya

🔗 ミーティングポイント ローム・スクエア

開場日時：会期中の土日祝 12:30-18:00



ミーティングポイント ローム・スクエア
Photo by Yuki Moriya

感想シェアカフェ

「感想シェアカフェ」とは、Shows プログラムの上演後に実施している対話型のイベント。鑑賞体験だけではない、より深い作品の楽しみ方を体験いただくための企画です。

同じ作品を鑑賞していても、実のところ、その体験は人それぞれに違います。作品を鑑賞した人が終演後に集まり、自分が感じたことを言葉にして語ったり、作品とともに鑑賞した人の話にじっくり耳を傾けたりすることで、互いに新たな気づきや違った視点、発見を「分かち合う＝シェアする」ことを目的としています。「面白そうだな」「時間があるから参加してみようかな」と思った方は、ぜひご参加ください。「言葉にまとまるか不安…」「他の方の感想を聞いてみたい」という方も大歓迎です。予約優先ですが、当日の飛び入り参加も可能です。



実施演目

梅田哲也＋追手門学院高校演劇部『まだ来ていないことがもう来ている』 10.4（日）17:30 の回

ホー・ルイアン『歴史のすがた／知能の立脚点』 10.10（土）17:00 の回

カルメン・リー&チュンシン・オー／シアター・デュ・プーレ『私書箱 No.211』 10.11（日）14:00 の回

アリス・リボル／Cia. REC『Adorno（装飾）』 10.17（土）17:00 の回

南野詩恵／お寿司『おすしえジプト』 10.18（日）12:00 の回

山下 残&ニャー・トゥイエン with プロジェクト・デイ・サン『giot-giot | しずくたち』 10.25（日）12:00 の回

ブックフェア

10.3（土）-10.25（日）

会場：京都岡崎 蔦屋書店

営業：10:00-20:00

参加アーティストの関連書籍や、フェスティバルのキーワード「ポケットに石ころ」をテーマに集めた KYOTO EXPERIMENT ブックフェアを「京都岡崎 蔦屋書店」で開催します。

ここでしか購入できない、KYOTO EXPERIMENT オリジナルグッズも販売します。よりフェスティバルを楽しむために、観劇前後にぜひお立ち寄りください。



🏨 パートナーホテル

KYOTO EXPERIMENT とパートナーシップを結んでいるホテルです。
会場からの交通の便もよく、観劇や京都観光を夜まで楽しんだ後は宿で
ゆっくり過ごせます。

ホテルに宿泊するお客様には、当日公演会場の受付でご提示いただくと、
Shows のチケット料金が¥500 引き（当日券のみに適用）になるクーポ
ンか、もしくは「KYOTO EXPERIMENT ステッカーセット」がもらえる、
パートナーホテル利用者限定えらべるクーポンを提供します。

- ・ HOTEL ANTEROOM KYOTO（ホテル アンテルーム 京都）
- ・ KAGANHOTEL（河岸ホテル）
- ・ node hotel（ノードホテル）
- ・ BnA Alter Museum（ビーエヌエーオルターミュージアム）
- ・ MAGASINN KYOTO（マガザンキョウト）
- ・ THE REIGN HOTEL KYOTO（ザ・レインホテル京都）



BnA Alter Museum
Photo by Tomooki Kengaku



HOTEL ANTEROOM KYOTO

📖 関連プログラム

📖 2026 年度 舞台芸術プロデュース講座～演劇・ダンス編～

地域の舞台芸術のプロデュース／企画制作領域の専門人材の育成プログラム。

強力な講師陣を迎え、舞台芸術プロデュース、舞台制作、マネジメントに関するレクチャーとワークショップを開催します。演劇やダンスをプロデュースする仕事とは、企画はどのようにつくられていくのかなど、社会と舞台芸術をむすぶ制作者たちのシゴトのイロハから、舞台芸術における「プロデュース」のさまざまなカタチを知り、未来の舞台芸術について考える講座です。



2027 年 1～3 月開催予定

会場：ロームシアター京都、京都芸術センター ほか

プレ講座

日程：10.20（火）19:00-20:30

会場：ロームシアター京都 会議室 2

講師：ロン・ベリー（Fusebox Festival エグゼクティブ・アーティスティック・ディレクター）

主催：ロームシアター京都（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）、KYOTO EXPERIMENT、NPO 法人京都舞台芸術協会、
京都芸術センター（公益財団法人京都市芸術文化協会）、京都市

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業（劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業）） | 独立行政法人日本芸術文化振興会

提携プログラム

京都学生演劇祭 2026

2011年から始まった京都学生演劇祭は、今年で16年目を迎えます。
今年のテーマは「はじめまして、こんにちは。」はじめて演劇祭に参加する人、
はじめて演劇祭を訪れる人、はじめて演劇を観る人。「演劇」を通じて、さまざ
まな出会いと交流が生まれる京都学生演劇祭だからこそ、一つひとつの出会いを
大切に、これからも演劇を続けるために、演劇祭をつくります。

9.24（木）-9.26（土）

会場：京都市東山青少年活動センター 創造活動室

主催：京都学生演劇祭実行委員会

提携：日本学生演劇プラットフォーム、KYOTO EXPERIMENT



劇団愉快犯『銀河旅行』
（京都学生演劇祭 2025 全国学生演劇祭へ推薦した作品）
撮影：脇田友

豊岡演劇祭 2026

2020年に始まった豊岡演劇祭は、観光やまちづくりと連動した回遊型の演
劇祭です。劇場はもちろんのこと、温泉街、海岸、高原、神社に伝わる木造
の農村舞台など、いたるところを舞台として活用して、さらに年々、思いも
よらない場所が演劇祭の会場として加わっています。上演プログラムは海外
からの参加アーティストをはじめ、国内外からアーティストやストリートパ
フォーマーなど70以上の団体が参加します。

9.18（金）-9.27（日）

会場：豊岡市、養父市、香美町、朝来市、新温泉町

主催：豊岡演劇祭実行委員会



CP Lab. 講座プログラム「Creative Track」

CP Lab. 講座プログラム「Creative Track」は、創造の現場を支えるため
に必要な知識や実践を学び、自らの専門性を深めるためのプログラムで
す。工芸・建築・メディア芸術の第一線で活躍する実践者を講師に迎え、
仕事の進め方や現場の課題、プロジェクトの組み立て方を学ぶとともに、
各分野の考え方や方法論に触れる場を提供します。また、交流を通じて
新たなネットワークを築き、将来的な協働につながる関係性を育みます。



2026年10月-2027年2月

会場：京都芸術センター

主催：文化庁、独立行政法人日本芸術文化振興会、公益財団法人京都市芸術文化協会（京都芸術センター）

OKAZAKI PARK STAGE 2026

ロームシアター京都の中庭、ローム・スクエアで開催する屋外イベント！ 大小のベンチが彩る広場でくりひろげられるのはさ
まざまな団体による魅力的なライブやパフォーマンス！

10.3（土）-11.1（日）

会場：ロームシアター京都 ローム・スクエア

主催：ロームシアター京都（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）、京都市

令和8年度文化庁文化資源活用推進事業

協力：京都市岡崎いきいき市民活動センター

📖 レポートリーの創造 ホープス

西田悠哉／劇団不労社 新作公演『暗黒の喜劇』

分断の深まる現代に蔓延る陰謀論的思考から着想した西田悠哉／劇団不労社の新境地。陰謀論を「諸所の現象の“点”と“点”を繋げ、有意の“線”＝〈物語〉を見出し、世界を理解するメカニズム」と捉え、それぞれの物語＝パラレルワールドを生きる人びとを描きます。受賞歴多数、進化を続ける劇団不労社の最新作に、是非ご注目ください。

10.9（金）-10.12（月・祝）

会場：ロームシアター京都 ノースホール

主催：ロームシアター京都（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）、京都市

企画製作：ロームシアター京都

共同制作：豊岡演劇祭実行委員会

助成：クリエイター支援基金

京都芸術センター制作支援事業



📖 レポートリーの創造 ホープス

野村真人『吉日再会』

2024年の大阪初演に新たな演出を加え上演。本作には、精神科訪問看護師と俳優、であると同時に、父であり息子である一組の親子が出演する。父は看護師としての仕事の現場を再現しながら、対話を通じて利用者である相手の心を見つめようとする。一方、舞台上での出来事を目の当たりにする俳優である息子は、演じるべき「利用者」の姿と、他の誰でもない「父の息子」である自分とのあいだに揺れる。看護師と俳優との職業的な関係／親子という私的な関係のあわいで、二人は同じ時間を共有し、同じ言葉を何度も繰り返す。

10.30（金）-11.1（日）

会場：ロームシアター京都 ノースホール

主催：ロームシアター京都（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）、京都市

助成：クリエイター支援基金

京都芸術センター制作支援事業

📖 レポートリーの創造 ホープス

野村真人 新作『観光客』

新作となる本作において、野村が選んだのは「観光」というキーワード。これまで野村が創作の中心としてきた「故郷」や「家族」という主題を、多くの社会的課題を残しながら、ますます身近な出来事として人々の注目を集める「観光」という視点から描き出す。個人の記憶や経験の聞き取りをもとに創作した2026年3月のワーク・イン・プログレス公演『観光』（仮）を経て、より多層的な群像へと、新たに迎える俳優とともに新作公演『観光客』を上演する。

11.6（金）-11.8（日）

会場：ロームシアター京都 ノースホール

主催：ロームシアター京都（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）、京都市

企画製作：ロームシアター京都

助成：クリエイター支援基金

京都芸術センター制作支援事業

会場

A: ロームシアター京都

／ミーティングポイント ローム・スクエア

京都市左京区岡崎最勝寺町 13

Tel 075-771-6051

- ・地下鉄東西線「東山駅」より徒歩約 10 分
- ・市バス 32、46 系統「岡崎公園 ロームシアター京都・みやこめっせ前」下車すぐ
- ・駐輪場あり、駐車場なし

B: 京都芸術センター

京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町 546-2

Tel 075-213-1000

- ・地下鉄烏丸線「四条駅」、阪急京都線「烏丸駅」22・24 番出口より徒歩約 5 分
- ・駐輪場あり、駐車場なし

C: 京都芸術劇場 春秋座

京都市左京区北白川瓜生山 2-116 京都芸術大学内

Tel 075-791-8240

- ・叡山電車「茶山・京都芸術大学駅」より徒歩約 10 分
- ・市バス 3、5、204 系統「上終町・瓜生山学園 京都芸術大学前」下車すぐ
- ・駐輪場あり、駐車場なし（原付・バイクはご遠慮下さい）

D: 京都府立府民ホール “アルティ”

京都市上京区烏丸通一条下ル龍前町 590-1

地下鉄烏丸線「今出川駅」より徒歩約 5 分

- ・駐輪場あり、駐車場なし

E: THEATRE E9 KYOTO

京都市南区東九条南河原町 9-1

Tel 075-661-2515

- ・JR「京都駅」八条口より徒歩約 14 分
- ・JR・京阪「東福寺駅」より徒歩約 7 分
- ・地下鉄「九条駅」より徒歩約 11 分
- ・駐輪場あり、駐車場なし

F: 京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA (C 棟 1 階)

／多目的ギャラリー (C 棟 6 階)

京都市下京区下之町 57-1 京都市立芸術大学 C 棟

- ・JR・近鉄・地下鉄烏丸線「京都駅」より徒歩約 6 分
- ・京阪「七条駅」より徒歩約 10 分
- ・市バス 4、7、16、81、205、南 5 系統「塩小路高倉・京都市立芸術大学前」下車すぐ
- ・駐輪場あり、駐車場なし

G: 京都市呉竹文化センター

京都市伏見区京町南 7-35-1

- ・京阪本線「丹波橋駅」西口前
- ・近鉄京都線「近鉄丹波橋駅」西口より徒歩約 2 分
- ・駐輪場あり、駐車場なし

H: ミーティングポイント BnA Alter Museum

京都府京都市下京区天満町 267-1

Tel 075-748-1278

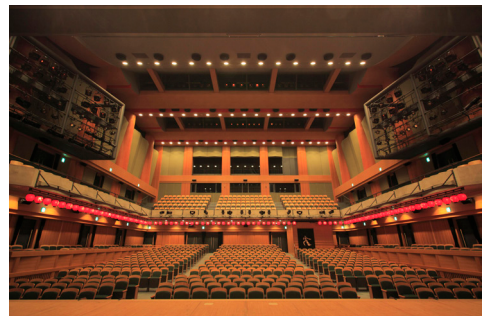
- ・阪急京都線「京都河原町駅」より徒歩約 6 分
- ・市バス 4、7、205 系統「河原町松原」より徒歩約 3 分
- ・駐輪場、駐車場なし



ロームシアター京都, Photo by Shigeo Ogawa



京都芸術センター, Photo by Nobutada Omote



京都芸術劇場 春秋座, Photo by Toshihiro Shimizu



THEATRE E9 KYOTO

チケット情報

2026年8月7日（金）12:00 よりチケット発売開始！

アーティスト		前売券				当日券	席種
		一般	ユース*・ 学生 *25歳以下	高校生 以下	ペア (前売のみ)		
遠藤 薫 ミトウ・セン	展示 遠藤 薫『二十世紀の睡眠法』 ミトウ・セン 『Unwritten Intimacy—暗黙の親密さ』	入場無料					—
	パフォーマンス	¥3,500	¥3,000	¥1,000 但し、 ミトウ・センパフォーマンスは 18歳未満入場不可	¥6,500	前売料金 + ¥500 (高校生 以下は 同額)	オールスタン ディング
梅田哲也+追手門学院高校演劇部 『まだ来ていないことがもう来ている』		¥4,000	¥3,000	¥1,000	¥7,500		自由席
ティアゴ・ロドリゲス 『By Heart—心で覚える』		¥4,500	¥3,000	¥1,000	¥8,500		指定席
カルメン・リー & チュンシン・オー / シアター・デュ・プーレ 『私書箱 No.211』		¥3,000	¥2,500	¥1,000	¥5,500		入場券
ホー・ルイアン 『歴史のすがた／知能の立脚点』		¥3,500	¥3,000	¥1,000	¥6,500		自由席
Asian Playwright Project	『バルバライソの長い坂をくだる話』	¥3,000	¥2,500	¥1,000	¥5,500		自由席
	『弔いのあした』	¥3,000	¥2,500	¥1,000	¥5,500		自由席
	フォーラム	無料・予約優先					自由席
キム・カンヨン、イ・ミンジン、パク・ミンヒ		¥3,500	¥3,000	—	¥6,500	前売料金 + ¥500 (高校生 以下は 同額)	自由席
アリス・リポル／Cia. REC 『Adorno (装飾)』		¥4,500	¥3,000	¥1,000	¥8,500		自由席
南野詩恵／お寿司 『おすしえジプト』		¥3,500	¥3,000	¥1,000	¥6,500		自由席
Echoes Now		¥3,500	¥3,000	¥1,000	¥6,500		自由席
山下 残&ニャー・トゥイエン with プロジェクト・デイ・サン 『giot-giot しずくたち』		¥4,000	¥3,000	¥1,000	¥7,500		自由席
石原菜々子、金子仁司／kondaba 『コンダバ川日誌』		¥3,500	¥3,000	¥1,000	¥6,500		自由席
Kansai Studies [展示] 石原菜々子、金子仁司／kondaba 『コンダバ川の地形図』		入場無料					—
Super Knowledge for the Future [SKF]		無料・予約優先 *一部有料プログラムあり SKF のプログラムはウェブサイトよりご予約ください。					—
ミーティングポイント		入場無料					—

チケット取扱

KYOTO EXPERIMENT チケットセンター

オンライン | <https://www.s2.e-get.jp/kyoto-ex/pt/> (セブン-イレブン引取またはQR 発券)
電話予約 | 075-213-0820 (セブン-イレブン引取)
窓口 | 京都市中京区少将井町 229-2 第7 長谷ビル 6F
取扱時間 | 平日 11:00-19:00 (開催期間中は無休)

ロームシアター京都チケットカウンター

オンライン | <https://www.s2.e-get.jp/kyoto/pt/> (要事前登録・無料)
電話予約 | 075-746-3201
窓口 | 京都市左京区岡崎最勝寺町 13 1F
取扱時間 | 10:00-17:00 無休 (臨時休館日等により変更の場合あり)

チケットぴあ

オンライン | <https://t.pia.jp>

※その他、各会場でもプログラムのチケット取扱いあり。(各会場で開催するプログラムのチケットのみ販売)
[京都芸術センター、京都芸術劇場 春秋座、THEATRE E9 KYOTO、京都府立府民ホール “アルティ”]

フリーパス&各種割引チケット

※フリーパスおよび各種割引券は KYOTO EXPERIMENT チケットセンターでのみ取扱い／前売のみ／本人のみ有効。

フリーパス | ¥30,000

ユース*・学生フリーパス | ¥15,000

Shows の有料公演 13 演目をご覧いただけます。(1 演目につき 1 回。Asian Playwright Project は両演目鑑賞いただけます。枚数限定。)

* 25 歳以下

※ユース・学生フリーパスは要証明書提示。

3 演目券 | ¥9,000

ユース*・学生 3 演目券 | ¥7,500

Shows の有料公演 13 演目の中から好みの 3 演目を選び、全て同時に購入することでお得に観劇できるセット券です。

* 25 歳以下

※ユース・学生 3 演目券は要証明書提示。

Asian Playwright Project セット券 | ¥5,500

Asian Playwright Project 『バルパライソの長い坂をくだる話』、『吊いのあした』の 2 演目をお得に鑑賞できるセット券です。

パートナーホテル割

パートナーホテル利用時に配布されるクーポンを当日公演会場の受付でご提示いただくと、Shows の当日券が ¥500 引き (前売料金) にてご購入いただけます。

※チケット 1 枚につき 1 名、1 回のみ有効。 ※前売券には適用不可

※前売券が完売した場合は、当日券の販売がない場合があります。当日券の有無については、公演当日に公式 X アカウントでご案内します。

その他

車椅子でお越しのお客様は、各料金の ¥500 引きとなります。お席の指定をさせていただく場合がございます。車椅子または障害者手帳をお持ちのお客様の介助者は、1 名無料となります。ご予約・お問い合わせは、KYOTO EXPERIMENT チケットセンターまで。

KEX サポーター

寄付（個人、企業版ふるさと納税）を通して KYOTO EXPERIMENT を支援していただける会員制度「KEX サポーター」を今年も募集しています。

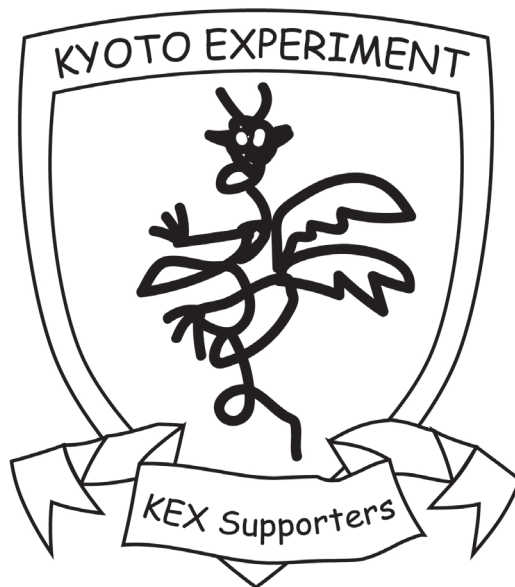
近年の KYOTO EXPERIMENT の財政状況は不安定ながらも、辛うじて運営を続けてまいりました。しかしながら今年は国際情勢の変化や物価高騰に加え、基盤となる助成金の交付金額が想定よりも大幅に下回り、フェスティバルの継続が危ぶまれるほど非常に深刻な状況です。いまや KEX サポーターは、KYOTO EXPERIMENT の重要な運営基盤のひとつとして、なくてはならない存在です。

KYOTO EXPERIMENT の継続と未来のために、どうかご支援をよろしくお願いいたします。

サポーター募集中

☞ 単年募集：8月2日（日）23:59 まで

URL ☞ <https://congrant.com/project/kyotoart/23012>



KEX サポーターとしてご支援いただく寄付金は、「ふるさと納税」制度の対象となり、税控除の対象となります。

☞ サポーター全員にプレゼント！

- KEX サポーター会員証（提示することで一部の公演で優先入場可能）
- 公演チケット先行販売のご案内（先行販売期間：8/4～8/6）
- 会員限定！スペシャルパーティご招待（9月予定）
- オープニングパーティ＆クロージングパーティご招待（10/3、10/25）
- ピクニックや感想シェア忘年会などの会員限定イベントご招待
- ウェブサイト・当日パンフレットにお名前掲載（希望者のみ）
- フェスティバルの裏側を発信！会員限定 Instagram アカウントへのご招待

※演目招待等の特典について

演目招待及びオリジナルグッズの特典は、京都市外在住の方のみお受取りいただけます。

10月

アーティスト		会場 *P.42 参照	プレ期間	3	4	5	6	7	8	9	10
				土	日	月	火	水	木	金	土
遠藤 薫 ミトゥ・セン	展示	F	展示 10.1 (木) -11.8 (日) 10:00-18:00 休館日：10.3-10.5、10.13、10.19、10.26								
	パフォーマンス			13:30 ★	12:00 ★♡						
				16:30	13:00 ♡ 17:30						
梅田哲也+追手門学院高校演劇部		A		18:30	15:00 ★♡						
ティアゴ・ロドリゲス		A									
カルメン・リー&チュンシン・オー ／シアター・デュ・プーレ		F									14:00 ☆☆
ホー・ルイアン		C									17:00
Asian Playwright Project	『バルパライソの長い 坂をくだる話』	E									19:30
	『弔いのあした』	E									
	フォーラム	E									
キム・カンヨン、イ・ミンジン、パク・ミンヒ		A									
アリス・リボル／ Cia. REC		D									
南野詩恵／お寿司		B									
Echoes Now		A									
山下 残&ニャー・トウイエン with プロジェクト・デイ・サン		B									
石原菜々子、金子仁司 ／ kondaba	Shows (上演) 『コンダバ川日誌』	G									
	Kansai Studies (展示) 『コンダバ川の地形図』	B		展示 10.3 (土) -10.25 (日) 10:00-20:00							
Super Knowledge for the Future [SKF]			① 9/15 19:00		③ 11:00			④ 18:00	⑤ 17:30		
① プレイベント KEX2026 キーワードよもやま夜話 ② Future Dictionary ③ ティアゴ・ロドリゲス アーティスト・トーク ④ ホー・ルイアン アーティスト・トーク ⑤ 映画『理大囲城』上映会&トーク ⑥ ポケットの中の服飾史 レクチャー ⑦ ケアと (エクスベリメンタルな！) 表現のあいだで ⑧ ロック・バランス・ワークショップ 入門編 ⑨ カルメン・リー&チュンシン・オー／シアター・デュ・プーレ ワークショップ成果発表会											
				② 10.3 (土) -10.25 (日) 10:00-20:00							

☆プレ・トーク

★ポスト・パフォーマンス・トーク

♡託児サービスあり

11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	上演時間
日	月・祝	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	
10.1（木）-11.8（日）10:00-18:00 休館日：10.3-10.5、10.13、10.19、10.26															—
															105 min （予定）
															70-90 min （予定）
															100-120 min
14:00 ☆♡	13:00 ☆														60 min
18:00 ★♡															85 min
12:00															85 min （予定）
15:30	15:00														65 min （予定）
	16:30														90 min
					17:00 ★	11:00 ♡ 15:30									160 min （予定）
						17:00	15:00 ★♡								50 min
						19:00	12:00 ♡ 18:00 ★	15:00 ★							120 min （予定）
										18:00 ★	11:00 16:00 ★				135 min （予定）
											14:00	19:00 ★	11:00	6:00 12:00 ♡	60-90 min （予定）
											19:00	15:00 ★	13:30 18:00	15:00 ♡	90 min （予定）
展示 10.3（土）-10.25（日）10:00-20:00															—
		⑥ 19:00	⑦ 19:00				⑧ 10:30 ⑨ 14:00								—
② 10.3（土）-10.25（日）10:00-20:00															

開催クレジット

主催 京都国際舞台芸術祭実行委員会

[京都市

ロームシアター京都（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）

京都芸術センター（公益財団法人京都市芸術文化協会）

京都芸術大学 舞台芸術研究センター

THEATRE E9 KYOTO（一般社団法人アーツシード京都）]

一般社団法人 KYOTO EXPERIMENT

共同主催 京都市立芸術大学

[遠藤 薫 | ミトゥ・セン、カルメン・リー & チュンシン・オー / シアター・デュ・プーレ]

独立行政法人国際交流基金

[ホー・ルイアン、山下 残 & ニャー・トゥイエン with プロジェクト・デイ・サン]

韓国国立現代美術館

[キム・カンヨン、イ・ミンジン、パク・ミンヒ]

助成 文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（国際芸術交流））

| 独立行政法人日本芸術文化振興会

一般財団法人地域創造

公益社団法人企業メセナ協議会 社会創造アーツファンド

助成 関西日仏学館

（個別プログラムに対する）

[ティアゴ・ロドリゲス]

オランダ王国大使館

[カルメン・リー & チュンシン・オー / シアター・デュ・プーレ]

ダンス リフレクションズ by ヴァン クリーフ & アーペル

[アリス・リボル / Cia. REC]

クリエイター支援基金

[Echoes Now]

寄付 CNC グループ 株式会社コスモネット

協賛 株式会社長谷ビル

機材協力 株式会社流（RYU）、有限会社クワット、株式会社タケナカ

協力 BnA Alter Museum、ホテル アンテルーム 京都、河岸ホテル、

THE REIGN HOTEL KYOTO、node hotel、MAGASINN KYOTO、京都岡崎 蔦屋書店、

京都学生演劇祭 2026、豊岡演劇祭 2026、就労移行支援事業所 INCOP 京都九条、

京菓子司 金谷正廣、硝子工房アドック、Asia Pacific Festivals Connection

ビジュアル撮影協力 石川大海、藤田彩佳、松木萌、米川幸リオン



京都国際舞台芸術祭実行委員会

委員長	山本麻友美（公益財団法人京都市芸術文化協会創造連携推進グループディレクター）
副委員長	石田洋也（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団専務理事）
委員	安藤善隆（京都芸術大学 舞台芸術研究センター所長／同大学教授）
	梅山いつき（演劇研究者／近畿大学文学部芸術学科舞台芸術専攻教授）
	小倉由佳子（ロームシアター京都 事業課長）
	小崎哲哉（ジャーナリスト／アーツ・プロデューサー）
	蔭山陽太（一般社団法人アーツシード京都理事／ THEATRE E9 KYOTO 支配人）
	小山田 徹（美術家／京都市立芸術大学理事長・学長）
	永田 彰（公益財団法人京都市芸術文化協会事務局長）
	吉岡 洋（美学者／京都芸術大学 文明哲学研究所所長）
	吉田健二（京都市文化市民局文化芸術企画課事業推進担当課長）
顧問	天野文雄（能楽研究者／大阪大学名誉教授）
	太田耕人（演劇評論家／京都教育大学名誉教授）
	茂山あきら（狂言師／NPO 法人京都アーツミーティング理事／ THEATRE E9 KYOTO 館長）
	篠原資明（京都大学名誉教授）
	千 宗室（裏千家家元）
	建畠 哲（詩人／美術評論家／京都芸術センター館長）
	畑 律江（毎日新聞客員編集委員／大阪芸術大学短期大学部客員教授）
	平田オリザ（劇作家・演出家／劇団「青年団」主宰／芸術文化観光専門職大学学長／京都市特別顧問／青森県立美術館館長）

（五十音順）

京都国際舞台芸術祭実行委員会事務局

共同アーティスティック・ディレクター 川崎陽子、塚原悠也

事務局	垣脇純子（事務局長）
	川崎陽子（エグゼクティブ・ディレクター）
	和田ながら（アシスタント・ディレクター）
	豊山佳美（ディレクターチームデスク）
	門脇俊輔（経理・票券）
	前田瑠佳、江口桃魚、齋藤あかね（広報）
	永澤萌絵（インターン・ボランティア統括）
	渡邊裕史（フリッジ：More Experiments）
	イフクキョウコ
	桑野桃寧、南 怜那、山崎美羽（インターン）
制作統括	山崎佳奈子（KANKARA Inc.）
制作	黒田裕子、齋藤 啓、芝田 遥、清水 翼（KANKARA Inc.）、豊山佳美、渡邊裕史
	[ロームシアター京都] 川原美保、後藤孝典
	[京都芸術センター] 青田亜香里、黄 宇曦、寺岡樹音、西田祥子、雪岡 純
	[京都芸術大学 舞台芸術研究センター] 中間慶子、水田雅也
	[THEATRE E9 KYOTO] 中村あさき
	[京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA] 藤田瑞穂、瀬田美晴

海外キュレーター招聘 コーディネーター 新田幸生

テクニカル	小林勇陽（ディレクター）
	北方こだち、小島聡太、十河陽平、綿中駿介（コーディネーター）
	さかいまお（デスク）

ドキュメントコーディネート	山口紀子
和文英訳	Art Translators Collective（植田悠、水野響、ベン・ケーガン、キース・スペンサー）、ウィリアム・アンドリュース、齋藤 啓、小嶺ミケラ
通訳	齋藤 啓、辻井美穂

アートディレクション・デザイン	小池アイ子
デザイン	田中ヴェートリ美南海
ウェブディレクション・デザイン・開発	白石洋太

アドバイザーボード	大澤寅雄（合同会社文化コモンズ研究所代表）
	富樫佳織（芸術文化観光専門職大学准教授）